

報 告

久留米大学文化経済学科完成記念シンポジウム
「文化資源と創造的地域づくり—九州マネジメント」

久留米大学経済学部

文化経済学科完成記念シンポジウム

2006年6月10日 13:00~17:30

久留米大学御井キャンパス

基調報告 「文化資源と創造的地域づくり—九州マネジメント」

久留米大学 経済学部 教授 駄田井 正

事例報告

石橋美術館 館長 平野 実

御花(柳川市) 代表 立花 民雄

筑後川まるごと博物館(久留米市) 事務局長 鍋田 康成

福田農場(水俣市) 代表 福田 興次

基調講演 「その地域固有の文化と地域づくり—九州の宝探し」

東京芸術大学 教授 河北 秀也

パネルディスカッション

コーディネーター 藤原 恵洋(九州大学大学院教授)

パネラー 河北 秀也(東京芸術大学教授)

姜 應善(文化経済学会〈韓国〉会長)

養父 信夫(「九州のムラ」編集長)

郷田美紀子(オーガニックごうだ代表)

駄田井 正(久留米大学教授)

基調報告・事例報告の部

司 会 皆様，大変長らくお待たせいたしました。それではただいまより，久留米大学経済学部文化経済学科完成記念シンポジウム「文化資源と創造的地域づくり—九州マネジメント」を開催いたします。まず，主催者を代表いたしまして久留米大学経済学部原田康平学部長よりご挨拶申し上げます。

原 田 皆さんこんにちは。シンポジウムの開催にあたって，久留米大学の経済学部を代表して一言，御礼とご挨拶を申し上げます。本日は私ども文化経済学科の完成記念シンポジウムに，多数の方にご参加いただき，まことにありがとうございます。また大変お忙しい中，シンポジウムなどの報告を快諾していただいた先生方，ならびに，私どもの開設記念にあわせる形で，ここ久留米の地で全国大会を開催いただいた文化経済学会の方々に心より感謝申し上げます。

さて，私ども文化経済学科，これは全国でも例を見ない大変ユニークな学科であるわけですが，この設立構想は10年近く前に持ち上がりました。当時，学部の中でこの学科の設立については，侃々諤々の議論が行われました。当時，入試を担当しておりました私は，設立反対派の最有力でありました。その理由は大きく2点です。1つは，大学冬の時代に世間になじみの薄いこういう学科を作って受験生が集まるのかということです。第2点は，学科として100人以上の学生を4年間にわたって教育する。それだけの奥行きを文化経済学が持っているか，そういう体系性を持てるかという不安でした。この2つの反対理由は，きわめて説得力があると私は確信しておったのですが，駄田井教授をはじめとする推進派の方々の「先に行かなければならない」という主張と何とかなるという楽観主義に流されて，結局4年前に設立されたわけです。余談になりますが，私は，経済工学という科目でリスクをとる大事さと，リスクをヘッジする大事さを教えており

ます。学科の設立にあたって私は、私なりのヘッジ戦略をとりました。それは入学試験を学科単位で行わない。学部単位で行うということであります。高校生に、文化経済学に行こうと思わせるのは無理だとするなら、とりあえず経済学部に入れて、その後に文化経済学科に入れればよいという発想です。おかげさまで現在まで、受験者に関しましては、不安になるようなレベルではなく安定したレベルで推移しておりますし、2年次に学科選択を行うのですが、一貫して経済学科より文化経済学科の志願者のほうが多い事で、まあ、結果オーライという形にはなっております。でも、先ほど申し上げた不安点、受験者に対するアピールでありますとか、きちんと体系的な教育ができるかという不安点は、未だ解消できたとは思いません。けれども、時代そのものは確実に文化経済学に向かって吹いているという風に思っております。

昨年の国勢調査で日本は、既に人口減少社会に移ったということが明らかになりました。それから先日報告されました出生率は、1.25と急速な少子化が止まっていないという事を示しております。つまり、もはや規模の拡大に頼った成長とか発展というのは、望めない時代である。とするなら地域は、それぞれの特性に密着した、それなりの展開を模索せざるを得ないだろうというふうに思います。そういう意味からも、本日のシンポジウムのテーマであります「文化資源と創造的地域づくり」というのは大変時宜を得たテーマではないかと思っております。本日は私も、一学生として河北先生をはじめ、それぞれの分野で活躍されておられます方々の提案を真摯に受け止めたいと思っております。また皆様にとりましても今日のシンポジウムが、大変実りある時間である事を切に願ひまして私の挨拶とさせていただきます。どうも本日はありがとうございます。

司 会 原田先生どうもありがとうございました。

それでは次に基調報告に移りたいと思います。久留米大学経済学部、駄田井先

生に基調報告をしていただきます。タイトルは「文化資源と創造的地域づくり—九州マネジメント」です。

駄田井 先ほど、原田学部長が文化経済学科を開設する時の内輪話をばらしたので、非常に話がしやすくなりました。なぜ、こういうテーマでシンポジウムを開催するようになったのかという事の説明をさせていただきます。現在、社会が文化経済学的な方向に、そしてまさに文化経済学が経済学の主流になるような方向に向かっている。そういう風に私も実感しております。私は、もともとは理論経済学が専門ですが、私が大学に入った頃の理論経済学というのは、経済学の勉強よりも数学の勉強に力を入れた数理経済学が流行の時代でありました。私も大学院の頃は、難しい数学の本ばかり勉強させられまして、文化の話しなんていうのは全然出てきませんでした。その私が、これではいかんということで宗旨換えして文化経済学科を作れということをお願いしました。おかげで、学部の皆さん非常に優しい方だったので、無事、立ち上げることができました。文化経済学科を立ち上げる時、まだ文部省がうるさい時でありましたので、文部省に参って「こういう学科を作りたい」といったら「文化経済学なんてあるのか」と言われました。文化経済学そのものから説明するのに大変苦労したことを覚えております。それから、もう卒業生が今年出ました。申請からもう6年ぐらい経っていることになります。そのころから、がらっと世間の様子が変わってきたんじゃないかと思っております。

文化経済学の方法で創造的な地域をつくるには、どういうことになるのかという事をかいつまんでお話したいと思います。お手元のレジメを参照してください。

まず、文化経済学の方法というのを理解するのに、私が勝手に名づけているんですけども、2つの柱が基本的な考え方になると思います。1つは、文化経済学基本方式と書いています。豊かな生活を実現することが社会の目的とします。

この場合、豊かな世界とは何か、あるいは、それをどう計測するのかというところが問題です。経済学では、この事に関し色々な議論がありますが、それは置いておきましてそういうことにします。レジメにあるように、物の豊かさで、豊かな生活を割つといて掛けます。これは、恒等式なので成り立ちます。その項の物の豊かさ分の豊かな生活というのは、文化力の問題になります。物の豊かさというのが経済力というのではないかと言う事で、豊かな生活というものは文化力と経済力との掛け算の様なものになっています。

なぜ物の豊かさ分の豊かな生活というのが文化力となるのかというと、これは考えられたらわかると思いますけれども、私が絵を描いたのとピカソが絵を描いたものを較べてみたら、使う絵の具の量は同じかもしれないが、出来上がる絵は違うのでありまして、まさにそれが文化力ということになる。それから、経済力と文化力がなければ豊かな生活ができないというのは、テレビを見たときの楽しさを例にすればよくわかります。テレビの性能というものがありますけれども、その性能が良くないとテレビ見ても面白くない。一方で、性能は何ほ良くってもですね、番組の内容が面白くなかったらテレビを見ても面白くないわけですよ。番組は文化の問題です。文化と経済の掛け算のようになっているという風に考えられます。

それから、2番目。1の柱がですが、最近この持続可能なという言葉がよく使われるようになっていきます。持続可能な地域の形成ということが最重要な問題になってきている。持続可能がむしろ最終目的ではなからうかと思っています。それで、これを実現することが重要なテーマであります。そのためには3つの原則というのがあるのではなからうか。すなわち、「持続可能性を優先する」という事と、「多様性を保持していく」ということと、「地域の自立」という3つがキーワードになるんじゃないかということでもあります。

この、持続可能な地域の形成ということにも文化力というものが、大きな影響

を及ぼすのだという事を言いたいのであります。それで、もう1度1番目の柱、文化経済学の手法のほうに戻って、豊かな社会は、経済力と文化力であるということ、もう少し詳しく話をさせていただきます。この、文化力と経済力というものはお互いに影響しあっております。独立ではないです。論理的には、5つの可能性があるわけです。「文化力と経済力とは何の関係もないんだ」という関係ないという関係ですね。それから、「経済力は文化力を向上させる」「経済力は文化力を低下させる」。それから、「文化力は経済力を向上させる」「文化力は経済力を低下させる」。この5つの可能性があります。5つの可能性自体もこれは、時と場合によって、すべてこの可能性がありえるのではなからうか。どれが一般的だ。これが一般的ではない。という事ではなくて、それぞれの可能性というのが常にあるのではなからうかと思います。従来の経済学というのは、大体、仮説的に文化力と経済力は無関係なんだと言う事でやってきているわけでありまして。例えば、ピグーの厚生経済学では、厚生一般と、経済的厚生という概念が出てきます。厚生一般というのは、社会体系だったり文化的環境を含めた社会全体の豊かさというものが厚生一般であります。そのうち、その経済的厚生というのは、貨幣で測れるものを経済的厚生と言います。交換価値を持っているものです。それでピグーは、厚生経済学に厚生一般と経済的厚生の中身は関係あるけれども、一応経済学の分析では、経済的厚生の変化は、厚生一般に影響を与えないんだという前提を置いています。伝統的には無関係ないといった形でやってきていると思います。しかし、最近では、そうではなく、この前ノーベル賞もらったアマーティア・センとかですね。いろいろな人は、社会全体の事を考えて経済を学ぶように変化してきているという事が確かです。

それで、こういう5つのルートの中で考えられるのは、従来の経済学というのはむしろ経済を発展させて、その結果として文化力も付くという発想ではなかったかということです。そのルートを強調しています。文化経済学ではむしろ逆で、

文化力の発展というものを経済力の発展に結びつけるというルートではなかろうかと。それが一つの方法ではあります。今日のいろいろの後の話なんかもそういった事に繋がっていくのではなかろうかと思えます。

もう一つの持続可能な地域の形成ということですが、持続可能性というのは、いろいろな定義がありますけども。要するに、我々の現代の世代が享受している、楽しんでいる生活水準と同じ水準を、後世の人にもその可能性を残すということです。我々の世代があまりいろいろむちゃくちゃする事によって、後世がそれで害をこうむることがないようにという事が、持続可能性の考え方でありま。私はこの持続可能の考え方は非常に大事じゃないかと思えます。なぜ、我々は社会を構成するのかというような議論には、伝統的には社会契約論がありますが、それよりもむしろ持続可能性という事を前面に押したほうが説得力があるんじゃないかなというような気がします。それから、これを最優先されるべきであるというのは、民主主義というようなルールというもの、その民主主義だからいいのだと言う事ではなくて、むしろ民主主義的ルールというものが、持続可能な社会を形成するのに役立つような社会的な意思決定の方法なのだという方向で論じられるのではなかろうかというふうに思えます。

2番目がですね、多様性と持続可能性というところに環境の概念が入ってきます。この環境が入ってくると多様な状況というのが関連してくるわけです。私は、筑後川の環境保全に関心を持っていろいろ活動しています。皆さんご存知のとおり河川法というのが改正されました。河川法の改正の基本はですね、今まで河川の管理をやるときに治水と利水を主眼としていたんですが、環境が加わったんですね。その環境が加わることによってどうなったかということ。住民の意見を聞かないといけないと言う項目が入るんです。なぜかと言いますと、治水・利水というのは、ある程度普遍的な、専門的知識でできるわけです。だからそれは、あまりに住民の意見を聞かなくても、河川工学とかいろいろなことをやった人の知識

ではできますが、環境が入ってくるとそうは行かないんですね。環境というのは、地域でものすごく違いがあるわけです。その環境の違い、環境の状況というのは、地域の住民だけしか分からない。東京において九州のことは判らん訳です。九州でもですね、久留米において、なかなか宮崎のことは判らない。それぞれの環境というのは、それぞれの独自の多様な特色を持っている。それで地域性というものを重要視しなくてはならない。多様性というものを、重要視しなくてはならないのです。

それと、多様な環境の重視が重要な理由になるのは、そこで意図して生活してきた中で、環境に適応した文化というものを培っているわけです。そこで、文化の多様性というところに、当然、関連してこななければいけないという事があります。その地にあった食べ物、あるいは、その地で取れる食べ物を食べるということは、これは非常に大事な事です。地球中の人すべてが、ビフテキ好きになったら大変な事になると思います。いろいろ自分の地域の食べ物を食べるからこそ、資源の有効な利用になるのであって、画一的な選好になると大変な事になります。ミスユニバースで一等になる人を、世界中の人が、いいと言ったらこれはもう大変な事になるわけです。いろいろな違ったタイプの人が好きというわけで、多様性の保持ができ平和になるわけです。そういう文化の多様性を保持するためには地域の自立性だとか、農というのが非常に大事になってくるのではなかろうかと思っています。

自由貿易論って言うのは、賛成できかねる所があります。自由主義が良いんだと言いますがけれども、自由貿易が世界中の人達を幸せにする絶対的な理由はないわけです。そして、「自由」と「自由の規制」との間で色々議論があります。基本的には自由が良いんだと思いますけれども、基本的に自由が良いのは、なにも規制せずに自由にやれば上手くいくのであれば、それが一番コストが掛からないわけで自由が良いわけです。だからその前提は何かというと、自由に任せても上手

くいくという事が実証されなくてはいけないわけです。その実証がなされずお題目のように、自由が良い、自由が良い、自由にするのが良いというふうに言っていて、それで上手くいくのかと思います。そういう意味で、地域の自立というのを促すような事をするためには、いろいろな事を考えなければならないのではないかと思います。30年のほど前ですけどポールディングという人が宇宙船地球号という事を言っていました。その中で彼は、江戸時代の事を評価しています。どういうことかという、江戸の幕府は長崎で貿易をやっていますが、あれは貿易で物を入れるというより情報を入れていたと。世界の情報はどうなっていたのかということは結構、幕府は解っていたと。それで、その情報を手に入れてですね、それが日本の中で作れるのなら作ろうとしていたということです。それで日本は、いろいろな事ができたと。だから今の現代の社会というのは、むしろ逆をやってます。物は自由に入りますが、情報は、情報も最近はインターネットなど色々入ってきていますけども。問題になる所ですけども、知的所有権とかですね、いろいろな事で情報の制限というのが起こってきます。

地域の自立ということから、地域文化を見直すということが非常に大事な事になってくるんじゃないかということです。それで、今日はこういうシンポジウムを開かしていただいたのは、九州各地で色々な地域の文化を生かした活動されているわけです。事例を、色々みなさんに分かって頂きながら、そしてそれを九州全体で連携させて、その地域の文化というものを、もっと連携の中からお互いに相乗効果を生むという、そういうマネジメントはあるのかなないのか、できるのかできないのか、そういう事です。基本的に今、道州制の話が色々出ておりますけども、そういう事が基本になって道州制というものを論じないといけないのではなからうかと。そういうふうな事で、今日のシンポジウムを開催させていただきました。

司 会 駄田井先生どうもありがとうございました。それでは次に、4名の方に

事例報告をお願いしたいと思います。皆さんのプロフィールについては、お手元の資料にございます。それではまず最初に、石橋財団石橋美術館長の平野さんに石橋美術館、成り立ちと運営と題してご報告をお願いしたいと思います。

平野 みなさまこんにちは。石橋美術館の平野です。スライドを使いますので座ってやらせていただきます。私は元来、医者、医学者でありまして、久留米大学の耳鼻咽喉科学講座の教授を勤めておりました。久留米大学での最後は、学長を8年勤めまして、2003年の12月に退職をしております。2004年4月、約2年余り前から、石橋美術館の館長を勤めさせていただいています。なぜ、医者の私が美術館の館長をしているのか、私にもよく解らないのですが。芸術とか絵については素人であります。

さて、石橋美術館は、ここから約2キロメートル弱の所にある石橋文化センターの中にあります。これは、文化センターの入り口からの光景で、緑のリズム、バラ園、ローズガーデン、ペリカンプールなどの向こうに見える茶色のレンガ造りの建物が美術館であります。2階建てです。

50年前、1956年に石橋文化センターの中心施設として創設されました。今年が50周年の記念の年でありまして今、50周年記念事業を1年間にわたって展開をしております。1956年は、株式会社ブリジストンの創業25周年の年でありまして、創業者であり当時社長でありました石橋正二郎さんが私財を投じて、石橋文化センターを設立し、郷里の久留米市に寄贈されました。その理念は、壁に刻んである「世の人々の楽しみと幸福のために」ということで、この正面入り口の壁に石橋正二郎さんが、自らが日本語と英語で刻み込んでおります。美術館の館長は私が8代目ですが、歴代の館長、学芸員、職員。みんなこの理念の下に仕事をしております。なお、経営の母体は東京にあります財団法人石橋財団です。

今年が50周年の年で、50th anniversary yearとして1年間通して6本の特別

企画を展開しています。本学会に参加されている皆様を、本来ならばご案内いたしたいのですが。あいにくたまたま、2本目と3本目の展覧会の間で、展示替えをやっておりますので休館になっております。来週の木曜日6月15日から第3弾が始まりますが、それが石橋財団50周年「雪舟からポロックまで」という展覧会であります。それで、その一部をちょっとお見せいたします。

印象派からポスト印象派で有名なポール・セザンヌの晩年の作品ですね。「サント・ヴィクトワール山とシャトー・ノワール」であります。印象派の代表的画家、クロード・モネの代表作「睡蓮の池」ですね。ご存知のとおり、モネは睡蓮の絵を40枚以上描いておりますそうで、世界のあっちこっちの美術館にあります。それからこれも、印象派からポスト印象派の代表的な画家でありますピエール・オーギュスト・ルノワールの「座るジョルジェット シャルパンティエ嬢」で、ルノワールの代表的作品の一つですが、ルノワールの絵というのは、すべてが美しく、明るくて、楽しい絵でありますね。それから、素朴派といわれる一派がありますが、その中のアンリー・ルソーが描いた「牧場」という絵です。このアンリー・ルソーという人は、もともと市の税関の職員で本職の絵描きさんではなかった人ですが、独学でこういう独特な画法を確立した人です。

これもよくご存知のフォーヴィズムの確立をしたアンリ・マティスの「縞ジャケット」で、この頃のマティスの描く女性は、首輪があって首飾りがある絵が多いですね。理由は色々な説があります。それから、非常に多彩な才能を持つ画家ラウル・デュッフィーの「オーケストラ」という絵ですね。音楽が絵の中から聞こえてくるような絵であります。それから表現主義の画家パウル・クレーの「鳥」という題の絵です。これ鳥に見えますか。このクレーという人によりますとですね、「芸術とは目に見える物を再現するのではなく、目に見えるようにする事なのだ」と言っているそうですが、クレーの鳥から受けた印象は、こういうふうにすると鳥が目に見えてくるそうです。それから、キュビズムで有名な画家パブロ・

ピカソ。この人は、長生きしていますね。大変たくさんの絵を描いていますが。その代表作の一つですね。「腕を組んで座るサルタンバンク」。ピカソにしては、比較的まともな描き方をしていると思います。この顔の右の所に余白がありますが、もとはここに女性の顔があったそうです。それを後で塗りつぶしたようですね。なぜ塗りつぶしたかは判らないのですが、今、絵にX線を当てたり、紫外線を当てたりして、表から見えない所に何があるかの研究が盛んに行われておりますが、この絵も、そういう研究を学芸員がしましたところ、ここに女性の顔があった。それを消してあるんです。まったく別の女性の顔の絵がありますが、その絵に描かれている女性の顔が、この横にあって消された女性と非常によく似ているそうです。

これはアメリカの抽象表現画家のジャクソン・ポロックという人の絵です。この人は交通事故で早死にしたんですが、何を描いたのか判り難いですね。この絵は、昨年購入したばかりで今回初公開です。この画家は床にキャンバスをバァッと広げておいて、絵の具をその上に撒き散らすんだそうですね。そして、できた図柄が絵になっていく。ドリッピングだとかアクションペインティングだとかいう方法で絵を描いた人だそうです。これは日本、いや世界初公開です。ザオ・ウーキーというのは、もともと中国人でフランスに帰化した人で、非常に独特な絵を描きます。一見抽象画のようですが、よく見ると何かの形に見えない事もない。見る人が、なんと見るのかご自由にというような描き方で、この画家に一昨年会いましたけれども、説明するものじゃないと。あなたが見たように見てくださいと言われました。

これは、日本洋画の先駆者。鹿児島出身の黒田清輝の絵です。彼がフランス留学中に書いた「針仕事」ですね。黒田の弟子である、藤島武二が描いた「黒扇」。これは、日本の国の重要文化財に指定されております。これはご存知の方、多いと思いますが久留米出身の天才画家であった青木繁。28歳でなくなっていますが、

彼の「海の幸」ですね。これも国の重要文化財です。それから同じ久留米出身の、今度は非常に努力をした、そして長生きをした画家、坂本繁次郎の代表作「放牧三馬」です。それから、九州出身の万年青年画家。まだ生きておられますね。80過ぎて。野見山暁治が書いた「風の便り」これも抽象と具象の間のような感じです。

これは、石橋美術館が持っている唯一の国宝です。中国の因陀羅と言う人が書いた「禅機図」で、これは禅の坊さんの意表をついた、鋭い言動を絵にしたものなんですね。「丹霞焼仏図」と描いてありますが、丹霞という坊さんが寒いので仏像を燃やして暖をとっています。そうしたらそこを、他の僧侶から仏像を焼くなんてけしからんと怒られたんだそうです。すると、この丹霞は、仏像の中にある仏舎利、仏の遺骨を取ろうとしているんだと言い訳したんだそうです。そして、そんなものは中にはないと言われて、それならただの木じゃないか、木を燃やして何が悪いと言ったという話を絵にしたのです。これが有名な雪舟の「四季山水図」春・夏・秋・冬と四幅一対であります。ここに出ているのは夏の絵なんですがこれも国の重要文化財になっております。それからこれは、江戸時代の池田孤邨という人が書いた「青楓 紅楓」の絵で、これは青の部分だけですが、これの右側にもう一つこれと同じ大きさぐらいの紅楓の絵がございます。これは中国、元の時代の青磁。青緑色の色に錆色の斑紋がありますが、これも重要文化財で日本に2点しかないそうです。もう1点は国宝になっています。

大変駆け足で展覧会のご説明をいたしました。ここは文化経済学のシンポジウムですので、ちょっと経営のお話をします。石橋財団という財団は、2つの美術館を経営しております。東京のブリジストン美術館と久留米の石橋美術館です。職員は、理事7名、監事3名、評議員9名、一般職員52名です。

経営の事を少しお話しますが、主な事業収入というのは、入館料とミュージアムショップの売り上げと。それから施設の一部をお貸しする利用料。それから主な支出は、人件費、特別展費、光熱水費、外注委託費、保険料などがあります。1

つの例を示します。これは2004年度のもので、この年は、収支が非常に良かった年です。でも、一番下にありますように約1億円の赤字です。収入の主なものは入場料。これが一番多くて2,780万円。ショップの売上げが1,660万円。それから施設をお貸しする料金が470万円。その他もありますが、全部で5,000万円足らずです。それから人件費が、これは普通の会社じゃ信じられないですね。6,970万円。つまり、総収入の140%。人件費だけに出ているんです。それから特別展費。これが総収入の56%ぐらい。高熱水費が総収入の27%、4分の1です。私は大学の病院長を務めていましたけれども、絵の保存に必要な、湿度、温度、それから光の管理には、大学病院の重症患者のいる部屋よりも、もっと厳しい要求を受けます。非常にお金がかかるということを美術館に行って初めて知りました。あとは、ショップで売っているものの購入費。大体、売上げの4分の3ぐらいですね。それから外注費等々でこの年はこれぐらいです。

それでは、どうやって運営しているのかという事ですが。日本に今、約2,000ぐらいの博物館と称されるあるいは美術館と称されるものがあるんだそうですけれども、全部知っているわけではありませんけれども、普通の計算をして黒字になる所はないと聞いております。それで、官公立の所は、その差額は国とか県とか市の税金で。それから私立、財団法人も私立ですが、そういったところは、別の収入があってそれを当てています。私ども石橋財団の場合は、石橋財団が株式会社ブリジストンの筆頭株主で約10%近いシェアを持っているので、その株の配当金が、この支出の数倍から6~7倍ぐらいあります。それで新しい美術品を買ったり、それから傷んだ美術品を修復したり、いろんな事を含めてやっているというのが現状であります。

それで、文化経済学ということで最後に締めくくらせていただきますと。21世紀には、文化芸術をどうするのかと言うことが非常に大きな課題だと思います。国民や市民が文化芸術にどのような価値観を共有するか。どの程度の、いわゆる

投資をするか、どの程度楽しむか、という事にたいするコンセンサスで文化芸術の振興が図られるだろうと思っております。どうもありがとうございました。

司 会 平野さん、どうもありがとうございました。それでは第2報告といたしまして、株式会社御花、代表取締役の立花民雄さんに柳川レポートと題してご報告いただきます。お願いいたします。

立 花 こんにちは。柳川から参りました立花と申します。館長先生みたいな文化は語れません。雑駁とした話になるかと思えます。柳川の文化というのは大体、有明海の干潟と一緒に非常にどろどろしたといえますか、あんまりすっきりしない話ばかりですけどお許しいただきたいと思えます。座ってお話させていただきます。

私は、本当はこういうサービス業というよりか農業が専門でございまして、東京農大を出まして日比谷花壇という花屋にいて、それから西ドイツのほうでガーデニングの勉強をして、自分の所は、農場とか蜜柑園とか果樹園が専門でございましたので、そちらのほうをやっていたんですけど、ひよんなことから御花という旅館・料亭、サービス業をやっております。それと、柳川市の観光協会長です。昭和27年に観光協会ができて、ちょうど昨年50年経ちますけど、その協会長を3年前から受けております。

柳川という所は福岡県の南部の方に位置し、有明海に面した所でございます。この有明海というのが、実は柳川を造ってきた海でございます。変な事を言うかとお思いでしょうが、実はここに沖の端川と塩塚川というのがございまして、これはもともと両方とも源流のない川でございます。今はこれがつながっているのは、矢部川という所に繋がっているんですけど、有明海の潮がダーと昇って行って下ってくるというただの溝でございます。それが江戸時代に矢部川から真水を

引くという状況で飲料水、あるいは農業用水を使うために水を引いております。当時、ちょうど1600年のはじめ柳川城の天守閣が完成した時の堤防はこの線です。ここに柳南中学ってありますけど、ここが慶長土居と言いまして。慶長年間にできた堤防で、それが今、400年経ちますと、この塩塚川と沖の端川に囲まれた面積がちょうど倍以上の面積になっています。これは、新田開発という広げたくて広げていると言う面もありますが、有明海の海が、土砂をしょっちゅうここに堆積させていきます。毎日毎日押し寄せて、そしてこの地先の方に土砂をためて堤防より高くなっていくんですね。当然そこは、堤防を越してくると危なくなります。その先に、もう一つ干拓堤防を防衛のために造ります。そうやって、繰り返して、繰り返して大体30年、50年、70年に一回ずつ干拓がされていって、ちょうど400年でこれだけの面積。有明海はずーと後退していつているんです。この佐賀平野もそうでございます。現に吉野ヶ里、あるいは筑後大堰の所まで有明海の潮が上ってくる。ですから今日、この柳川市内と言うのは、有明海が満潮のときは水面下にあるんです。ですから、そういう水面下の町ですから掘割がたくさんないと、これからの梅雨時、一時的にどーと雨が降った時、その水が満潮のときは排水できません。潮が引いてから一気に排水すします。ですから、排水できるまで、それだけの掘割を抱えなければならないという事です。そういう「もたせ」の中のまちづくりがされてきて、これからも久遠とされていきます。近代的な堤防がどんどんどんどん高くなってきて、当初この辺は、2メートル、3メートル位の堤防です。今は、今ここは、7メートルから8メートルの堤防ですけど地先にいつているから深くなっているだけで、この堤防の高さはずっといっしょなんですね。ですから、堤防がなければまた海に戻ってしまうという土地柄でございます。ですからここは、水郷柳川と言われてはいますが、水が豊かと言うよりか、水に大変苦勞して出来て来た城下町です。

戦後、なんとか活性化していきたいというのか、食べていくため、私どもの父

は大名屋敷を開放して料亭・旅館を始めました。昭和25年に創めましたけど、お客さんが居る時代じゃございませんし、父は養子でよそ者だったものですから、有明海の魚介類で大変珍しくムツゴロウがいたり、メカジヤがいたり、ワケとか、そういう魚介類が珍しいと言う事でこれを料亭の素材にいたしました。そして料亭の素材、大名家でございますので、当時は、戦前までは伯爵家ということで一般の人が入れない所だったんで結構、地元の人が「とんさん（殿様）が料理屋始めたけん、行ってみよう。」ということで行ってみますと、「なんだ、いつも食っている有明海の煮つけばっかしじゃないか。」ということで、大変不評を買ったそうでございます。それでも大変おいしいものだったんで、それをずっと続けてきました。続けてきたと言いましても、昭和25年から35年、40年頃までは、お客さんが来るだろうかというくらいの観光地でした。市が合併して大きくなっていきながら昭和40年に、市の方も北原白秋の生家保存運動が行われます。生家保存運動と同時に、高度成長に入るわけなんですけど、白秋生家保存運動を全国紙で各マスコミがキャンペーンしていただいたお陰で柳川が有名になりました。さらに柳川市は、温泉を掘り当てます。そこで、その温泉を掘り当てる事で、御花も初めて大名家の屋敷跡に観光客受け入れのための温泉付きの大食堂というのを造ります。

その頃から、少しずつ観光客が増えてくるわけなんですけど。その間、これから市を上げて観光客を受け入れようと言った頃に実は、柳川の掘割。川下りで有名なんですけど。この掘割が非常に富栄養化してまいります。そしてもう船が通れないぐらいの藻がたくさん繁藻するんですね。それまで飲み水だった所が、高度成長時代になると使う水と捨てる水をみんな区別するような生活になる。それまでは、この水を私たち子供の頃は飲んでいたんですけど、いつのまにかもう下水にしようという状況になってしまいます。汚れて再生不能と思われる小さい水路は埋めてしまおうというのが市の考えでございました。それをちょっと待てと言う

事で当時、水路課の係長をしておりました広松さんと言う方が、（お亡くなりになりましたけど）その方がもう一度水路の役割を見直そうということで、住民説明を行います。その住民説明と同時に、この住民説明会に、もう自分たちで埋めてしまったから、ここはもう全部埋めてしまったがよいということですけど、これを埋めてしまったら先ほど言いましたように、また有明海に戻ってしまうぞという話を懇々とされながら、自分たちの子供の頃の話がされました。「子供の頃、その頃飲んどったな」と、「ここの堀で泳いどったな」と、体験上の共感がどんだん話が出てきて、「よし、もう一っぺんみんなで掃除を試みるか」と言う事で水が流れ始めます。その数年前に柳川市の方で、行政で浚渫しますが、行政でしたら、また翌年には埋まってしまうという状況です。要するに、人任せ、行政任せでは上手くいかなかったと。そこで、住民が立ち上がって運動をして、やっと水の流れを取り戻す事ができました。そういう共感のきっかけで、住民に環境問題に対する意識に変化が起こってくる。婦人会では、合成洗剤追放運動なんかで自分たちで手作りの石鹼を作って使うようになりました。

自分たちの街づくりが少しずつ、昭和、そうですね55、56年くらいから、新幹線が博多に入る頃から、だんだんだんだん柳川も賑わってきます。そして名物のうなぎ飯を、観光客の方が柳川名物とおっしゃってくださり、当時5、6軒しかなかったうなぎ飯屋さんが、今では20数軒ございます。だんだん増えてきております。また、川くだりのきっかけとなりましたのは、白秋祭、北原白秋先生が亡くなったのは昭和17年で27年から、白秋前夜祭というのをはじめました。それは、もちろん地元住民が仕事に遊びに普段に船があったと言う事でございましたけれども、昭和36年から船会社ができて、お客様相手に船遊びを始めるきっかけをつくりましたのが白秋祭じゃなかろうかと思えます。この白秋祭は、毎年毎年、年々盛んになっていきまして、夜の水上パレードが一日110艘の船が3日間4キロの川くだりを、沿道にさまざまな、伝統・文化的な出し物や、太鼓、三味線、歌が

あったり踊りがあったりと川くんだり沿いにたくさんあって、その中をゆっくり船が下っていくというお祭がもう50、60年続いております。

それから最近のヒット作は、「さげもん」というお雛様の小物ですけど。これは、おばあちゃん達が昔作って初節句のときにお祝いにプレゼントするんですけ。それもいつの間にか淋しくなっていた郡部のお祭ですけど、これを10年前にひな祭りをやろうやという事で、「さげもんめぐり」を始めました。大体これは郡部のお祭で、私も「さげもん」って聞いたときによくはわかりませんでした。何だろうっていう状況でした。私の子供が、長女が生まれたときに、そういえば、こういうのを2、3本いただいたなど。そこで、家内に聞きますと、もうタンスにしまいこんでしまっていると。と言う状況で、これをみんなで出そうやという話になったら、やっぱりおばちゃんとかお嫁さん達がああじゃったこうじゃったという話が非常に盛り上がってきて、だんだんひな祭りと言うのが盛んになりました。まだ10年目、11年目でございます。このひな祭りの「さげもん」というのが皆おばあちゃん達を作るんですけど、年間5、6本ぐらいしか作れないんですけども、今ではこの「さげもん」の即売会で一日2,000万ぐらいと売れてしまいます。遠方から買いに来るといような状況になっております。

新しいものを作っているのではなくて、古いものを古いままにしておくといつも廃れてしまいます。かといって新しいものを持っていくとなかなか根づかない。古いものをどうリニューアルして新しくしていくのかという事が、柳川の課題です。地域の持つ文化性といいますか、城下町ですので大名家や武家屋敷の文化もあります。町方の文化もありますし、あるいは農村部の文化もあります。ですけど、そこに眠っている文化というのがまだまだたくさんありそうな気がします。特に有明海は、もっともっと還有明海に目をやると、そこで色々な交流が行われていました。そういう素材と言うものを眠らせておく事ではなくて、これをリニューアルしながら資源に、観光資源に、そしてあわよくば経済にも結び付けていき

いなと思っております。

御花の方は大名文化ということで今月の初めには、広間でロウソクの明かりでの能を開催しました。この能も12年ぐらい前に復活したものでございます。来年は、国名勝指定という松涛園に舞台を組みまして、一晚限りでございますけども、薪能を予定しております。そういう、多様な文化性をリニューアルしながら、柳川もがんばっていきたいと思います。どうも、つたない話、雑駁な話でありましたけど、以上報告させていただきます。どうもありがとうございます。

司 会 立花さんどうもありがとうございました。それでは、第3報告といたしまして、筑後川まるごと博物館運営委員会事務局長、鍋田 康成さんに、筑後川まるごと博物館と題してご報告いただきます。お願いいたします。

鍋 田 こんにちは。筑後川まるごと博物館の鍋田といたします。パソコン使いますので座って説明させていただきます。その前に、よく「まるごと博物館」といいますと、どこにありますかとよく聞かれるんですね。我々が毎月活動している場所は、筑後川発見館くるめウスといたしまして、ゆめタウンの隣にある施設があるのです。そこで活動していますので、その事ですかとよく聞かれるのですが、我々の博物館は、とても建物の中に納まるようなものではなくて、展示物が大きすぎて、4県にまたがっております。つまりフィールド・ミュージアムです。

これから内容の説明させていただきたいと思います。筑後川は、前長が143キロあります。これは、久留米市の上空から撮った写真です。同じところの写真ですが、このように筑後川の特徴というものをよく表した写真です。下流のほう、あるいは有明海の方を上の方に見た写真ですが。くねくねと蛇行しております。このような形ですが、別名一夜川と言います。一夜川というのは、一夜にして川

筋が変わる事を言うのです。昔は、洪水に悩まされた川であったという事から言われています。また筑間川という筑前と筑後との間の川という言い方もあります。寛政時代にですね、黒田藩と有馬藩のちょうど境目がこの川筋だったという事からこの筑間川という別名もあります。そういった事から、筑後川は、昔から洪水に悩まされこの水をどうやって使おうかという、人々が悩んできた川でもあるわけです。その筑後川を、上流のほうから我々の仲間である学芸員の池田さんが写真を撮っておりますので、その美しい写真を見ながら紹介をしたいと思います。まず上流の冬の九重高原ですが、これは火山と森、森林地帯です。それから中流に行きますと、これは菜の花と耳納連山の景色ですが、豊かな穀倉地帯となっております。それから下流のほうに行きますと、これは一番最下流の所にあります橋の上から撮った写真ですが、ちょうど有明海のほうを見て、向こう側に島原半島が見えております。雲仙普賢岳がかすかに見えている写真です。ここは低平地、クリーク地帯です。そして、行き着くところが有明海という事になりまして、有明海は昔から宝の海と呼ばれており、魚介類が豊富なところですが、これには筑後川が大きな影響を与えているわけです。下のほうの2枚の写真は、干潟のムツゴロウと干潟で遊ぶ野鳥の姿なんですが、最大の干満差が6メートルもある日本最大の干潟地帯です。こういった、それぞれの特徴が明確に分かれているわけです。この筑後川は、この流域の全体図を見ても4県にまたがっております。そして109万人がこの流域に住んでいるわけです。このちょうど真ん中の所に黒い数字が入っておりますところが筑後川ですね。真ん中に久留米市があります。この筑後川が古代はですね、これが昔は、昔といってもほんの50年位前までは、交通の大動脈であったわけです。そういった筑後川が、昔から人々の生活と非常に密接に関わっていたのです。

そこで私どもは2003年に筑後川流域連携倶楽部から独立しました。これは久留米大学で公開講座をやっておりました流域講座。これの卒業生が、我々20人が立ち

上げたわけですけども。ここに目的として、地域の宝物をそのまま1つの博物館とみなして学習の場としよう。そして流域のいろんな方々とネットワークを結んで、流域の環境向上に努めよう。そして、資源を生かしながら、地域の活性化を生かして筑後川流域全体の再生につなげようということで動いております。今年で6年目になるんですけども。次々と学员も増えまして現在43人という事があります。関係する団体が、流域内で約50団体ほどあります。で、この我々のまると博物館の最も重要な人材の供給源になります、それがこの教室で現在毎週、市民公開講座「流域講座」を開いております。今年6年目になります。前期後期やっております、現在200名を越える学生さん、それから一般市民の方が受講されております。その中で地域現地学習会を前期3回、後期3回やっております、それぞれの各地の現場を訪問して、現地で体感する活動をしております。そこから生まれました学芸員なんですけど、ここで言う学芸員はいわゆるボランティア学员ということでして、筑後川の案内人解説人という意味合いで私たちが使っている言葉です。現在、5期まで43人が認定を受けまして活動をしておられるわけですけども。幅は広くて、20歳代から70歳代までいろんな経歴を持った方々が活動されております。

それから、2つ目の我々の重要な事業の1つに「筑後川なんでも発見団」という活動をしております。これは、筑後川発見館くるめウスという施設がゆめタウンの隣にあるわけですが、その施設を利用して、筑後川と環境を知るような、川に親しんで誰でも楽しめる気楽な体験イベント講座・展示。そういった事を、いろいろ組み合わせて毎月定期的に行っております。目的としましては、川に関心を持ってもらおうと。それから、一般市民の方が、地域を知ると言う事をですね、どんどん知ってもらって、愛着と誇りを持ってもらおうと。それから、市民が地域に定着して地域の活性化につなげよう。それと流域のいろんな方々との連携の枠を造っていこうということで、そういう方々の協力も得ながら、こ

ういろいろなイベントなどをやっております。

そういうことで、河川環境の向上を最終的には目指していこうという事でやっております。その中のいくつかを紹介しますと、1つは人気講座、よか川筑後川の自然の魅力を伝えるということで、今、美しい写真を撮っております、我々の仲間のメンバーがスライド映写を、流域の季節の見所を解説するという事を年に2回ほどやっております。これは、いつも30人か40人か定期的に来られる方がおられます。それから、我々の中で1番人気といいますか人が集まるのが筑後川大水害を伝えるという伝える会というのをやっております。今から53年前、昭和28年大水害がこの地域にありました。そこのスライド映写で聴き語りをして体験者の証言を聞くという活動もしております。歴史を伝える講座もやっております。それから、流域で活躍した人物。例えば田主丸の「鯉とりまーしゃん」。あるいは、大川出身の古賀政男の物語そういったような講座も開いております。それから、子供向けの筑後川キッズ探検隊という活動も年間通してやっております、こどもエコクラブという事で環境活動を子供さん中心にやっております。これは毎年夏休みに、そのキッズ探検隊の中で高良川子供探検隊というのを夏休みに、子供さんと一緒に川に入って遊ぶという事を、川の面白さを伝えるという活動もやっております。身近な水を調べよう。あるいは、不思議な石鱒の力を調べる。といった、実験を交えたような講座もやっております。それから、懐かしい紙芝居。昔風の昭和の紙芝居を復活しようという事で、流域で廃れつつある民話を紙芝居で伝えていこうという活動も始めております。その他に、流域団体との交流と連携。さまざまな事をやっております大川の酒蔵コンサートとそれから、日田の水の森の植林活動。それから、夏休みの中でやりますが、三隈川リバーフェスタということで川遊び体験。こういったことも子供たちと一緒にやっております。それから、筑後川まるごとインターネット博物館も昨年、ライブ中継を実験的にやっておりました。これは、今旬の現地情報を直接インターネットを通じて

伝えていくということ、東京と各地を結んでやっております。あと、筑後川新聞の編集ということも我々の役割の1つです。1万5千部ほど発行しておりますが、地域の情報誌という事で旬の話題を提供しております。すべて自主取材という事で記事を集めるのは学芸員がやっております。

最後に、まるごとリバーパーク構想についてお話したいと思います。これは、豊かで持続可能な地域づくり環境と経済の両立と統合、地域文化を生かそうという事で、この筑後川全体を川と水を主題としたテーマパークとして捉えようということで、地域全体を12のテーマに分けて、それぞれの特色を生かしたツアーを組み立ててですね活性化につなげていこうという事です。今まで、いくつかモデルツアーをやってまいりました。1つは、有明海の潮干狩りと柳川ひな祭りの旅ということで実施したものがあつたわけですが、これは、有明海の潮干狩りをしながら採つたアサリをその場で食べて、柳川のひな祭りが次の日にありまして流しひな祭りですけど、その時に子供たちに流す雛を夜、実際に作つて実際に流すという体験を交えてやるという事をやっております。もう1つ、中流の秋月朝倉三連水車と原鶴温泉鵜飼いの旅ということで、一般のツアーでしたら見て回るといった感じのツアーになるんでしょうけれども、我々の場合は、すべて体験を織り交ぜます。秋月では草木染体験という事で全員染物をやる。それから、三連水車を見まして、すぐ近くにある巨峰狩りもやる。そして、原鶴温泉に行きまして鵜飼い舟に乗るわけですけども、普通は鵜飼い舟に乗るだけなんですけども、特に変わつておりますのは、匠さんの話を船から降りた後に聞くということを実施しております。これが非常に人気でして、この写真のように付近の旅館外からですね泊り客が浴衣姿のまま、メンバーではないですが聞きにくるという風な形にもなつております。そういった体験を織り交ぜた形でいろいろやっております。

流域には豊富な歴史がありまして、その歴史の中にはこういう江戸時代の地図なんですけど、筑後川には4つの大きな堰がありました。現代でも、このうち3

つが残っております。そういったものを活用しながらそして、昔からいかに流しが行われていたが現在途絶えております。この舟運によって上流と下流は繋がっていったんですけども、このような繋がりもめざして今後は舟運を復活させてやっていこうというようなことも考えております。それで、祭りですが。こういった日田の祇園祭。それから、これは大善寺の玉垂宮の鬼夜ですね。日本3大火祭りの1つです。それから、大川の風浪宮の祭り。これは、2000年前から続くお宮があるわけですけど。こういったような、地域の資産を生かしながらですね、これから地域の活性化につなげていく事ができるのではないかというふうに思っております。

最後に、この写真は下流の風景で、葦原とエツ漁の船なんですけども現在、エツがですね今のこの季節はちょうど旬なんです。7月まで、ちょうどエツ漁ができます。このエツという魚は、筑後川下流にしかいません。ちょうど、筑後大堰の下までエツが昇ってきて、そこで産卵するわけですね。そういった、食と自然、文化、歴史。こういったものを組み合わせた地域資源をですね十分つなげていけば、地域の活性化はできるのではないかというふうに思っております。以上でまると博物館の紹介を終わらせていただきます。

司 会 鍋田さんどうもありがとうございました。それでは第4報告といたしまして、株式会社福田農場ワイナリー代表取締役の福田興次さんに福田農場と題してご報告いただきます。よろしく願いいたします。

福 田 ただいまご紹介いただきました、水俣から参りました福田でございます。私どもの農場の事。それから水俣の事。そしてまた、地域の環境の問題についてお話を申し上げたいと思います。今年は、チツソが創業して100年。そして、水俣病の公式発見から50年というちょうど節目の年でございます。そのなかで、私

ども農場は、45年ぐらいの歳月が経っておりまして、私の両親が、花が咲いて実が実り、そこに弁当もって遊びに来てもらえるような場所にしたいということで始まりました。だから財産を築いたと言うよりも夢を引き継いでできました。自然との闘いの中で、農業は経済的なものの不安定さがありますが、人間を豊かにする全ての元を持ってるという観点に立つことができました。しかも、水俣の体験から地域イメージや地域ブランドの大切さ。個人の信用や、会社の信用は当然生活を支えている上で大事と思っていますが、地域の信用となりますと、意外と皆、誰かがするものだ自分には関係ないと思いがちです。しかし、これほど大切な物はないと思います。その当時、水俣病の原因が分からなかったという事で町の名前が病名になってしまいました。しかし、もうここまできましたら、名前を変えるよりもそのような体験があったから良かったと言えるように未来に向かっていく事が大事だと思います。それには最初に自分が考え方を換え、行動することが大切だと思います。

パワーポイントを使って話を致します。我々の水俣川は、源流がすべて自分たちの町の中にあり、それが不知火海に流れ出しているという地の利を持っております。水俣には、湯の児温泉と湯の鶴温泉、海と山に二つの温泉があります。それと水俣は、水俣病の体験を生かして、環境学習でいろんな方が訪れております。そしてゴミの分別についても今、21の分別をやっておりまして、それを研修においてになる方々も年々増えております。修学旅行につきましても今年は8,000人以上の方が今現在訪れていますが、その半分ぐらいがお泊りになっています。また地域のコミュニケーションも、そういうゴミを通して普段顔を合わせない方もそこで顔をあわせると、一つのコミュニケーションが生まれています。

水俣市はISOの習得をいち早くしています。しかし、今現在はお金がかかりますから、自己審査に切り替えております。そして今、学校のISO版とか幼稚園のISO。そして保育園のISOなど。独自に自分たちの目標を設定して、それ

を達成させようと言う事、それぞれの地域の中で、また学校などそういう中で行われています。そしてまた、トレイをなるべく使わないとか買い物袋を使わないお店などをエコショップとして認定しています。それから、環境マイスター制度もやっています。環境に優しい仕事をなさっている方を認定しています。そういう方々、農業面あるいは、竹細工とか紙漉きなど、そういう方々も認定をされております。それから、エコタウンと言う事で九州では北九州・大牟田・水俣がエコタウンの指定になっております。そこで、ビン、タイヤ、ペットボトル、オイル、アスファルト、家電のリサイクル工場が進出しています。それを見においでの方々が多くなってきています。

ご存知のように新幹線の全線開通は5年後、ゴルフで言うならば、5打でパーをあがるためには今何をしないといけないかが必要であろうと今思っております。「タイミングとネーミング」は大切と思っています。確実にやってくるタイミングと製品を商品にするために、ネーミングの効果は大きいのではないのでしょうか。

個人的なことです。新幹線が来るということでつばめに名称が決まりました。「つばめの卵」という登録商標を出しておりましたら、JRさんと石村萬成堂さんがぜひその名前を貸してくれという事で、「つばめの卵」の名称を貸しています。

これは家の農場の事です。昭和35年頃から始っております。私が高校2年の頃から始まりまして、アルバイトで開墾を手伝っていました。大学を昭和43年に出まして、そしてみかん狩りを熊本では初めて観光農園としてスタートさせました。その2年後に、みかんの倉庫を改造してバーベキューを創めました。そこで、みかんを農協に出荷した後のみかんを手絞りしてからお客さんに出した事から、今度は加工という問題に入りました。今現在の建物は、バレンシア館として生まれ変わっています。スペインにつきましては、また後ほどお話申し上げます。

水俣は、徳富蘇峰・蘆花が生まれた所でありまして、徳富蘇峰は日本は非常に女性の役割が遅れていると。そして、婦人会を作りなさい。ということで、日本

で始めて水俣に婦人会が出来ました。昭和8年に水俣婦人会が表彰されたときに、蘇峰が手紙を出した中に、「工業が栄え、商店街が繁栄をして非常にめでたい事だと。ただし、経済的なものばかりに目を向けず、精神的・心霊的な物との調和が大事である。そのような調和の町を目指しなさい。」という事を手紙の中に書いてあります。その20年後に水俣病が発生しました。そういう意味でも、先人の教えをいかに学んでいくかという事が大切かと感じております。福島に行ったときにまだライブドア事件とかそういうのが、あまりでる前の事でしたが、二宮尊徳が言っていた言葉の中に「経済のない道徳は空論である。道徳のない経済は犯罪である。」ということを一早く言っていますね。道徳と経済は一体である。だから、そういう考え方が本当の豊かさや大事なものを、どう調和していくか、そういう両面の豊かさを持ち合わせた人材育成というのが非常に求められていると思います。

「悩める貝のみ真珠は宿る」で水俣病という大きな悩みがございました。アコヤ貝に核を入れますと出せないものは抱き込んでいくと。だから、そういう体験だったら良かったと言えるように核を、輝く真珠に造りだす事が大切だと思います。それぞれが自分の生活を見かえしたり、また企業としての自分の仕事を等して何が出来るかという事を考えていくことが大切だと思っております。

商品開発についての考え方をみかんになったつもりで話をしようと思います。みかんの花の香りや、今度は蜂蜜を採りその蜂蜜でビールを造ったりしました。みかんの種は、昔は化粧水に使われており、これからの課題だと思えます。後、皮ですが皮はこれから大きな主役になると思えます。だから今、皮を主役にして中身を副産物にするという発想で取り組みをしています。この中でも書いてあるのは、ワインやパン、色々な石鹸にもなっております。また、いろんな企業との連携を含めて取り組みをやっております。サングリアというワインは、ワインを美味しくするためにバレンシアオレンジを加えるスペインで飲まれているワイン

でございます。そこからスペインというテーマを持って取り組みをしています。そしてまた、皮は砂糖をまぶしたボタン漬けに、チョコレートをまぶしたらピールチョコになり洋菓子としても美味しいものができます。その他に、チッソと一緒にやっているミカンオイルは、洗浄力がございます。それで、洗剤やボディーソープ、ハンドソープを共同開発で一緒にやっております。

ワインについては、メルシャワインとやっています。ビールについては、アサヒビールとやっています。必ずそういうパートナーをしっかりとふまえて、私どもにも資本参加していただいて、ご一緒に取り組みをしていただいているわけです。これから面白いのはみかんからバイオエタノールを取ろうと検討しております。また、みかんの皮が花火にもなるという話も聞いております。色々な可能性があるのですね。一つの事をいかに、誰かが深く掘り下げていくかという事。それが大事だろうと思っております。

また、不場流行。この精神ですね。水俣はサフランの産地、玉ねぎの産地、海の幸があると言う事でパエリアがすべて出来るわけです。サングリアを作り、パエリアを作る。そして、不知火海を地中海に見立て、甘夏をバレンシアに置き換えて、リヤス式のきれいな沿岸ですのでその沿岸を守ることにつなげてきました。ちょうど1992年のバルセロナオリンピック、セルビアの万博、コロンブスの新大陸発見500年という年でございました。水俣が埋立地を完了して、新しい再生の年。この年はブラジルで世界環境会議が開催された年でもありました。

写真にもあります。スペイン館が売店であり後ろの方がセルビア館では、生ビールを製造しています。梨、みかんのビール、ブルーベリーなどのビールも作っております。建物は全部リサイクルでやっております。レンガなども、溶鉱炉の耐火煉瓦がレンガの壁画を作っております。ミシンの足がテーブルに生まれ変わったり、ボーリング場のレーンが工場見学の通路だったり、大きなテーブルに生まれ変わったりですね。まくら木が活用されたりもしております。このような形で、

すべてリユースでこの建物を作っております。また修学旅行生には、そういう宝物探しをしております。

この写真は、環不知火海です。不知火海に流れ出す水系でみると、すばらしい自給率を持っているのですね。環境を考えるときは、行政の線引きを取っ払って雨になったつもりで考えてみると良いと思います。それには地域のエゴを取っ払って、エゴの濁点をとるとエコになりますから、エゴをエコにして環境を観光にしていこう。そういう循環共生型のモデルを作ることは、まさに世界に発信できる環境不知火海として、そこに水俣という体験が必ず世界に通用する環境商品を作り出すのだと今思います。

最終的には人でございますから、オセロゲームと一緒にです。端と端が変れば真ん中が変るように、自分を変れば周辺が変っていく。それが遅いようで一番早いのです。「一年の計を考えるときは、穀物と一緒に種をまけばいいですし、10年の計を考えるならば木を植える。100年の計を考える時は、人を育てる」最終的には人づくりとなってくると思います。そのような形で、水俣のすべての体験を生かす。つらいという字は辛いと書きますが、上に棒が一つ加わりますと幸せになります、つらい経験があると幸せになる。有難いというのは、後ろから読むと難有りですから、難があったから有難いと、常にそんな気持ちで前向きに「本当に良い所に住んでいますね。」と言われるような、ふるさとを残したいと思っています。どうもありがとうございました。

司 会 福田さんどうもありがとうございました。以上を持ちまして事例報告の部を終わらせていただきます。興味深い4つのご報告どうもありがとうございました。それではここで、10分間の休憩を取りたいと思います。3時10分になりましたら、また後半を始めたいと思いますのでお席にお戻りくださいおねがいたします。

基調講演の部

司 会 皆様、お待たせいたしました。それでは本日のシンポジウムの基調講演を東京藝術大学デザイン科教授、株式会社日本ベリエールアートセンター代表の河北 秀也先生にお願いいたします。お手元の資料にございますように河北先生は久留米市のご出身でございます。ご講演のタイトルは「その地域の固有の文化と地域づくり九州の宝探し」です。では、河北先生お願いいたします。

河 北 河北です。どうもよろしくお願ひします。基調講演ということでパンフレットが事務局のほうから送られてきまして、ナントカ宝探しと書いてありますけれども、それを見るまで全然何の題名か分からなかったんですけれども。その前に講演の趣旨を書いてくれておりまして、何分話すのか、どういうふうに話すのか全く分からなくて、それも書いてなくて。その後に速達でパンフレットが送ってきたしだいです。そのときに始めて題を知ったわけですから、聞けば僕なりに話をしたいと思ひます。

僕は久留米市の出身でして。久留米で生まれて久留米で育ったんですが、それで私は末っ子なんですけども、上に兄が2人いて、姉が1人いるんです。彼らはみんな、今で言う「うきは市」ですね。うきは市で生まれてすごしました。それで、私のお袋がですね、田主丸が実家です。もともと。吉井から千足の方に嫁に来たんですね。それで、僕は久留米で育ってるんですけど、今、大川のインテリア塾の塾長をやっておりましてね。結構、筑後川沿いですね、先ほど筑後川まるごと博物館なんていう構想が出ているようなんですけど、非常に面白い事だと思ひています。それで、僕らの子供の頃というのはですね筑後川に近づいてはいけなはいといわれてたんですね。何でいけないかという、あそこには宮入貝という貝がいて、日本充血吸虫というのに寄生して、あの辺で、沼とかそういう所にズボ

ズボット入っていくとそれが人間の中に入って成長が止まってしまう。だから私の家のすぐ近所にも、大人だけれども日本充血吸虫が入って背の小さな人がいたりしました。だから非常に怖いから、筑後川には絶対近づいてはいけないと言われてました。まして泳ぐなんて事はとんでもない。だから非常に良い川なんですけども花火大会なんかもよく行きましたけれども、なんかこう、全然縁がないというわけではないんですけど、遠ざけとかなくちゃいけない存在だったんですね。

久留米市なんかも大きく変わりました、本当に情けないくらい変わりましたね。僕が住んでいたのは通町の5丁目なんですけども、日吉町の交差点から北にちょっと行ったところなんですけども、ちょっとさらに北のほうに行くと寺町とか蛍川町とかがあってさらに行くと、蓮根堀なんかがあったんですね。蓮根堀が非常に怖い所です、子供ですからね。ぬるぬるの所にずぶずぶずぶと入っていくような所ですからね。そこに正月になると、うちのお袋が、蓮根の葉っぱからつゆを取ってきてなさい。書初めしなさいというんですね。それが怖くてですね、いつ、沈まるかわからなくてですね。今は、全くないですよ。あそこに家がずらっと建っていますけども大丈夫だろうかという気がしますね。ああいう所に家を建てて大丈夫だろうかというふうに思うんですけどね。バイパスなんかもあの辺通ってますね。それで大きく変わりました、通町の5丁目に住んでいたんですけども、通マチと言わなければいけませんね。通チョウではないらしいですね。それで、反対側が広がったんですね。通町は戦争で焼け残りました。そこで狭い道を片側の列の家を取り壊して広くしたんです。だから今家がないんです。僕の家が。だから私の兄なんかは2人とも博多に住んでいます。それで、久留米にたまに帰ってきてても、自分の家がないもんだから、なんか不思議な感じがしてですね、ある意味では非常に残念なんです。だから、久留米も本当に変わりました。良く変わったんじゃないで、悪く変わりましたね。なんででしょうね。それはやっぱり、文化というものを大切にしなかったからなんですね。

どっからお話しようかと思うんですけども、去年の秋ぐらいですかね。小泉首相がですね文化を大切にしていこうというプロジェクトを作ったんですね。世界がうらやましがる日本にしようと、もっとたくさん来てもらおうと世界から。それで、文化論を研究するプロジェクトを作ったらしいんですよ。それで、文部科学省から何人とか、経済産業省から何人とか、いろいろ出向させてプロジェクトチームを作った。それでその研究のために、藝大の僕の話聞きに来たんですね。そのとき彼らが何を言ったかという、私たちはですね経済の事だったら1時間しゃべれと言われればしゃべれるし、いくらでもしゃべれるし、よく知っていると。ただ、文化のことは、さっぱり判らないと。まるで判らないと。たぶんそうだと思うんですね。だから、今日本というのは、産業時代が終わったのが日本なので、今ではバブルが崩壊して、やっと文化に目がいきだしたという処なんですね。だから文化経済というのは、本当に頼りだと思うんですけど。日本の自動車とか、経済界の人にしても、それからいろいろな社長なんかにしても、それから行政関係とか政治関係にしてもですね、文化の事ほとんど知らないんでしょうね。本当に知らない。何にも知らない。知らなくてもいいと思ったんですね。とんでもない話ですよ。秀吉なんか馬鹿みたいに我々は言いますけれども、秀吉だって本当に文化に詳しく、それは当たり前なんですよ、文化に詳しいということは。それは、教養というか当たり前知っておかなくてはいけない事だと思うんですよ。

それで、日本が産業社会が終わったというか、反省が始まったというのは、イギリスなんかは200年位前ですよ、ところが日本が産業社会の反省が始まったのはついこの間ですよ。僕はヨーロッパと比べると日本は100年くらい遅れると思うんですけども、日本みたいにこんなに汚い国はないですよ。本当に。日本は全部、ゴミ箱です、ゴミ箱。今年の5月に、うきは市に墓がありまして、河北家の墓がありまして、次男が結婚したんで墓参りにいったんです。今年の5

月に。ゴールデンウィークの時に。それで、うきは市の昔の先祖といいましたけど、その山北というところの河北家の、山北の河北ですよ。山北地区なんです。そこに河北家の墓がありまして、昔はよかったですけど、建物なんかを見たらバラックなんですよ。本当に汚くしていますよね。みごとに、久留米市なんて汚いんですよ。明治通りの中心部だけは、きれいになっているんですけど、ちょっとこっちに来ると、看板とかなんとか見ても本当に汚い。そういうところもきれいにしなくてはいけないんですけども。

要するに、100年でですね日本は成長期は終わったと思うんですよ。で、成熟期に入ったと思うんです日本は。ところが、教育とか行政のシステムとか、そういうものが全部成長期のシステムになっているんですよ。日本の国家の方針というのが、産業重点国家を目指すということなんですからね。産業重点国家を目指すというのが日本の国家方針ですからね。その国家方針でもってすべてが作られましたよね。行政のシステムも一点集中という都市のシステムも、教育のシステムも。この中で英語がべらべらに話せる人いますか？いないのが当然です。一人いましたか。何かしゃべってください。冗談です。冗談です。何でしゃべれないかという、必要としなかったんですよ。成長期に英語がしゃべれる必要がなかった。だから、英会話を教えなかったんです。だから6年間。我々は、最低6年間は英語を学んでいますよね。中学校・高校と。でも全然しゃべれない。習ったものは何かというと、英文解釈と、英文法ですよ。英文解釈というのは、英語が読めるようになればいい。英文法というのは、英語が書ければいいという事ですよ。しゃべればいいという教育を全く受けてはいませんから。要するに、何でそれを教えたかという、英文解釈というのは、向こうの進んだ文献を読むために、とにかく読む必要があった。それで、英文法を何で習ったかという、それで解らない事を聞く必要があったと、手紙書いて。それだけのために英語を学んだんですよ。会話をするという事は、全然何も考えていなかったんです。

それで、言葉というものは、文化が凝縮したものですよね。例えば久留米の言葉と隣の田主丸の言葉と吉井の言葉とそれから、うきは市の言葉と微妙に違う。方言を話してますよね。博多と比べると久留米は馬鹿にされますよね。久留米から来たっちゃろうがって馬鹿にされますよね。それは何でかという、これだけ標準語がテレビとか新聞とかラジオとかでしゃべられてるのに、何で方言を我々しゃべっているかという、文化的土台が少しずつ違うんですよね。隣の村と我々の村とは違うんですよね。だから、そういうものって地域を代表すると同じなんです。地域のやり方だろう。いろいろな商品も儲かったらいいとかそういう事ではなくて、一村一品運動というのが隣の大分県で始まりましたね。何で始まったか知ってますか。あれは、一村一品運動というのは、非常に良いことだと思っているでしょう。何で大分県人がやったかというんですね。一村一品運動というのは、大分県というのはですね、日本の都道府県の中で2番目に民事訴訟が多いんです。一番多いのは東京ですよね。会社がいっぱいあるから。その次に多いのが大分県なんです。それは何でかという、すぐ訴えられるんですよ。どんどん足引っ張られるんですよ。だからとにかく村と村でがんばるんですよね。そうした、大分県民の特性を利用したのが一村一品運動なんですよね。本当のことを言えば。そんな事はどうでもいいんですけども。

そうやって、英会話がしゃべれないという事を、もう少し話します。それは何でしゃべれないかという、日本語と英語の単語はどっちが多いと思いますか。日本語と英語どっちが多いと思いますか。単語数が多いのは、日本語？普通そう思いますよね。でも、日本語って言うのは、カタカナとかひらがなとか漢字とかあって、言葉が非常に多いですよね。謙譲語とか尊敬語があつて多い。多そうに見えるでしょ。ところがですね、英語のほうが3倍多いんです。だから、構文は簡単なものが多いんです。同じ力でもパワーとかいろいろあります。8個くらいありますよね。でも、全部微妙に違うんですよね。言葉が微妙に違う。翻訳できない

くらい違うんですよ、日本語に。それで、日本語はどのようにして成り立っているかという、上下関係で成り立っているんですよ。上下関係で。英語ってのはこんなになってるんですよ。一点しかないんですよ。X・Yとしてもなんでもいいんですけど。日本語って言うのは、日本人って言うのは、日本語って言った方がいいですね。日本語というの、上下関係の差で会話するんです。要するに年がいくつとか、どこの村の出身とか、どういう役職に就いているとか、就いてないとか、そういうことを知った上でですね、会話を始めるんですよ。それが判らないと一向に会話が進まないんです。上下関係が判らないと。だから日本のビジネスマンというの、最初に必ず名刺を交換するんですよ。ああ、どこどこの会社だ。うちの会社では同じ役職だけでも、ここの部長だったら俺のほうが上だなーとかですね。そんな事考えるんですよ。この人は久留米大学の教授か。俺は、九大の教授だから、俺のほうがちょっと偉いかもしれない。って思ったりするわけですよ。それで初めて、尊敬語とか謙譲語とか使いながら話を始めるんです。ところが、英語って基本的には、そんな事はないんですよ。手を切ったら真っ赤な血が出るんじゃないとか。お互い人間じゃないかという所から会話がスタートする。だから、年も聞かなければ、名刺も最初交換しないですよ。だから、同じ人間同士として話すんです。だから言葉の種類が違うんですよ。そっから教えていかないと、英会話というのはいくらでもできないんですよ。だから、X軸とY軸でいえば日本語と英語の接点は一箇所ぐらいしかないんですよ。そこから全然はじめてないんですよ。習ってないからしゃべれないのは当たり前ですよ。だから、文化というのが、いかに大切なのかというのが、お解かりいただけると思うんですけども。

ワールドカップでも、日韓が共同開催しましたよね。先進国で日本ほど芸術・文化・スポーツに対して地位が低い国はないんですよ。例えば、映画監督とかです。黒澤明級の映画監督がですね死んだら、向こうでは国葬ですよ。ブラジル

のですね若いレーザー、アイルトン・セナっていたでしょう。彼も、国葬ですよ。日本では、絶対国葬なんかやらないですもんね。それから、ヨーロッパで晩餐会みたいなのがあると一番上座にはもちろん大統領が座りますよね。それから、その次に座るのは首相じゃないんですよ。あるいは大企業の社長じゃないんですよ。大企業の社長なんてうんと下ですよ。美術館の館長とか、大芸術家とかが座るんですよ。地位が全然違うんです。例えば、ニューヨークの5番街というのがありますよね。メインストリート。あそこなんかは、1年間で、150日間位止められるんですよ。なぜ止めるかというとな映画の撮影とか、パレードとか。そういうことで止めるんですよ。それをなんとも言わないんです。だから、そういうことにきちんと貸すんですよ。僕はですね、ここに「いいちこ」って書いてありますけどね。「いいちこ」の撮影のために、テレビコマーシャルを撮らせるためにアイルランドでギネスビールの社長の家を使ったんです。ギネスビールの社長の家って言うのは、門から入って屋敷まで行くのに車で15分かかります。それから、屋敷の中に湖が2つあります。池じゃないですよ、湖が2つあります。山が3つあります。そこで、あらゆる動物が住んでます。鹿とか、いろんな動物がすんでいます。屋敷から湖までですね、ずっと芝生が植えてあるんですけど。芝生というか牧草ですね。国立競技場見たいな感じで。そういう所に住んでるんですけども。それで「いいちこ」の撮影のために貸してくれるかと言ったら、普通だったらだめですよ。同じアルコールの会社だから。でも、すぐOKですよ。

それから、これは別の仕事なんですけども、アイルランドのある町で、商店が、4、5軒しかないんですよ。そこに45日間止めた事があるんです。普通ここは、撮影のために入っちゃいけないという。そういうところもOKなんですよ。だから文化に対する思いというのがまったく違うんですよ。「ブラックレイン」という映画がありましたよね。松田優作が出た。あれなんか日米の合作ですけど。アメリカでいろんな撮影をやって。アメリカの撮影では、いろいろ警察がいっぱ

い協力してくれたけれども、日本じゃまったく協力してくれないんですよ。もう、ひどいもんですよ日本は。だからそういうことは、目を向けたらきりがありませんけど、どのくらい文化的な地位が低いかという事は、現在はですね、国立大学の中で東京藝術大学より国立聾和学校の予算が一つ上なんです。同じように思われているんですよ。だから芸術家はその程度なんです。だから、文化経済学会の活躍は本当にうれしいですよ。だから僕は、文化そのものをやっていますからね、毎日。やはり非常にいろいろな問題が起こってくるでしょうね、これから。経済の事しか考えてませんからね。ところが、これからは文化をきちっと理解してやらないと、日本は本当にダメになるんですよ。本当にそれしかないんです、もう他には。だから、本当に真剣に考えてもらいたいと思うんですけども。要するに、産業社会が終わったのは今だと思うんですよ。ところが、すべてが産業社会の国家方針ですから。産業重点国家というのは、それでもってすべてが出来上がってるんですよ。行政のシステムも、都市のシステムも。だからそれが、大転換になるんです。

それで、いろんなことが言われてるんですけども、2020年に世の中大きく変わると言っている人がいます。これはドラッカーという人です。去年の末に死にました、97歳で。僕は今ドラッカーを越える会と言うのを作っているんですけど、いろんなほかの大学の先生とか、編集者とかと。ドラッカーを超えようと。ドラッカーは90代まで現役でした。この中で、ドラッカーのことを知っている人はたくさんいると思うんですけども、大予言者だと言われてますよね。でも、自分は予言なんて全然やった事はないと言っています。現状分析すれば、細かく分析してきちんと分析すれば、こういう結果を出さざるを得ないと言っているわけなんですよ。だから予言しているわけではないと。だから、いろんな国の為政者とか企業の社長とか相談に行ってるんですけども、一番だったのはサッチャーですよ。サッチャーのいろんな改革の中にドラッカーの提言によるとちゃんと書いて

るんですよ。1冊本を書くと1000万部と売れるわけです。その中に、最近出た本で2020年に世の中が変わると言ってるんですよ。読まれた方もいるかもしれませんが、2020年に変わると言っています。

この改革は、いったいどういう改革かという。今までとは、何のつながりのない変革だと言われてんです。何のつながりもないというのは、要するにシステムとかそういうものがつながらないと。江戸から明治になる時にはいろんなシステムをひきずっているんです。それから、戦争が始まる前と後もそうなんです。基本的にずーとひきずっている。改革はありましたけど。明治の改革とか戦後の改革とか問題にならないですもんね。500年に1度の変革だと。これは、今までの時代と何の脈絡のない、何もつながらない改革だということですね。本当にそうだろうかと思うんです。今から500年前はどうだったんだろうと思ったんですよ。500年前に何があったかという、世界史的に見ればアメリカ大陸が発見されたんですよ。アメリカという国がなかったんです。それで、こんな大きな力のある国ができたんですよ。そのような事ぐらいの事が起こるんだと。日本ではどうかという、信長のころで、信長もすごいですよね。信長の遺品というのが国立博物館にいっぱいありますけども、今までの改革者と全然違いますよね。外国からいろいろなものを取り入れたことも全然違う。そういう変革をやっている。そういう時代が、もうすぐそこに迫っているというわけです。

だからこういう学会とかもいけない事いっぱいあるんですけどね。僕もデザイン学会とか呼ばれて講演なんかやった事ありますけども、こういう学会がいけないのは、非常に公平にちゃんとやるんです。ちゃんとやる事がいい事だと思ってるかもしれないけれども、自分の思う事をきちっとやりなさいという事を言いたいんです。自分の思っている事を、だからこういうふうに考えたらうまくいくんじゃないかとかですね。論理的にはこうやったらいいとか、そういうことじゃなくて、自分のやりたい事とことんやりなさいと。本当にやりたい事かどうかで

すよ。それはいけない事のように言われてますけども、特に行政なんかそうですね。全然、そういうふうには思わないじゃないですか。それは、とんでもない話なんです。何を例に言おうかと思うんですけど、サラ金の報告が目に付いたんですよ。そのメッセージがあるわけです。たちまちキャッシングと書いてあるんです。分かりやすく借り方が書いてあって何にも悪い事書いてないんですよ。簡単にキャッシングができます。とか言ってタレントの喜んでる顔が見える。そういう広告があったんです。次の広告もそうなんです。その広告を見ると、そのメッセージがですね、サラ金からお金を借りるとひどい目にあうぞ。というメッセージが感じられるんです。そんなことは何にも書いてないんですよ。でもそう伝わるんですよ。要するにそれはどうしてかということ、写真を撮るときにカメラマンは、いやだなあーっと思って撮ってるんですね。さらにそれに、レイアウトしているデザイナーは、本当もうやりたくないなあ。こんな仕事って思いながらやってるんですね。みんな喜んでやってないんです。何でそういうことを言うかということ、デザインや広告は人のために作っているようですがそうではないんです。

モーニングっていうコミックの雑誌がありますよね。ご存知ですかね。モーニングっていう雑誌があるんですけど。そのモーニングっていうのがうちの事務所に、僕が直接やったわけではないんですけど、僕の下デザイナーがやってたんですよね。これは漫画の表紙なんです。表紙が漫画なんです。ニュースも何にもないんですよ。漫画の雑誌というのは。もともとモーニングという雑誌は、朝からコミックを読めるような内容にしようと思った雑誌で、ネーミングの所からたずさわりましたけれども。それで、号によって売れる号と売れない号が出てくるんですよ。これは、タイトルというかネームといいますけれども、ネームというのは、売れてる作家の名前が載ると、その売れるんじゃないかなと素人考えで考えたわけです。ところがそうじゃないという事がわかってきたんです。

何で売れないかというのはですね、僕の下を担当者がですね、風邪引いてたんです。病気っぽかったり腹が痛かったんですよ。調子悪いとき作るとそれが伝わるんですよ。本当に体の調子が良くてぱっと作った表紙なら売れるんです。そういうものなんですよ。東京なんかは、駅で買いますから週刊誌ってのは、だから、これ読むと元気になるかなあっと思いながら買うわけですよ。なんか自分をリフレッシュしたいから、缶コーヒとかジュースを買うのと同じなんですよ。そういう気持ちで漫画とかコミック雑誌とか買う。だからそれが判りまして、「読むと元気になる」というキャッチフレーズを入れてますね。そういうものなんです。

自分を抑えてやるような事をやっちゃいけないんですよ。すべての事に対して。きちっと自分が思って満足する事をやればいいんです。だから一度だってこうやったら売れるんじゃないかとか、そんな事考えてやってるわけじゃないんですよ。僕が行きたい所に行ってるし、本当にきれいな写真を撮ってるし、スタッフはみんな本当にそう思ってるんですよ。だから伝わるんですよ。これは、あらゆることに共通している事だと僕は思うんですけどね。だから、要するに冷静にあまり何とかでやるんじゃなくて、やりたい事やりなさいという事はそういうことなんです。

後ちょっとありますね。時間は。だから、「いいちこ」のことを話すと。「いいちこ」って今日本で一番売れている蒸留酒です。売り上げが「いいちこ」を出す前は、わずか3億円の会社でした。今も九州じゃあまり「いいちこ」は飲まないでしょうけども、一時期ちょっと落ちました。去年くらい、売り上げが。で、また売れてきました。それは、それにいろんな理由があるんです。

企業は、文化を持っていないんです。日本には、文化科学って分野がないんです。それで、これはフランスなんか非常にしっかりとしたものがあるんです。フランスの日本研究なんて本当にすごいですよ。日本研究だけじゃなくて、フィリピン研究もすごいし世界中のことがすごいですよ。だが日本には、そういう文化

科学に関する研究が全然ない。それは当然といえば当然なんですね。急速に経済が発展しましたから。そんな事をやる暇がなかったって事もあるんですけども、これからはそういう研究をしていかななくちゃいけないという事で、「いいちこ」の会社から雑誌を出してます。『季刊 iichiko』っていう。僕が発行人です。それは、文化科学の分野から企業も考えていこう。そういう商品も考えていこうと作った雑誌です。これもう20年続いています。で、『季刊 iichiko』の内容は非常に難しいです。ここに書いたら、大学の先生が書いたら、学术论文の一つとしてちゃんと評価してくれるんですね。世界中の図書館にも送ってます。国際版も出しています。もう20年です。それからポスターも20年続いています。ポスターも、人間と自然の共生ということがテーマですから、それで20年続けています。テレビコマーシャルも20年続けてます。それで、パッケージデザインもお酒を飲むとはどういうことかをきちっと考えたパッケージデザインを作ってます。それで2回パッケージ・デザインのグランプリを取りました。「いいちこフラスコ」・「いいちこスペシャル」つというので2回グランプリを取りました。それで売り上げも伸びています。3億円しか売り上げがなかった企業が、100億円の利益を出すようになってます。ちょっと前に久留米で、商工会議所ですかね、青年部かなんかの120周年かなんかのパーティーで、やっぱり基調講演を頼まれました。その10年ぐらい前にも頼まれました。その時は、これから市長になろうという人もいました。そのとき4時間やりましたね。ちょうどバブルの頃でした。その時に、河北さんの話なんか聞いても、いっちゃん面白くないんですよ。私たちは、明日100万儲かる話が聞きたかったんだと言うんです。そういう悪口を言うんですよ。それで、青年会議所の120周年の大会のときに、「おまえら、100万円儲かる話が聞きたかった。そう言いつて悪口言っただろう。でも、僕の言う事をちゃんと聞いて、その通りにやった企業があるんだと。隣の県にあるよと、いま、100億円の利益を出してるぞと。お前ら出すようになったか。」っていうふうに文句いった

んですけども。もう時間無いね。じゃあ終わります。じゃあまだシンポジウムがあるそうですから、この辺で終わります。すいませんでしたどうも。

パネルディスカッション

司 会 河北先生どうも刺激的な基調講演どうもありがとうございました。それでは、パネルディスカッションのほうに移りたいと思いますのでコーディネーターの方、パネリストの方、どうぞ前の方によろしくお願いいたします。それでは、皆さんのご紹介をいたします。まず、九州大学大学院教授 藤原 恵洋先生、コーディネーターをお願いいたします。パネリストに基調講演をしていただきました河北先生。そして韓国よりお越しいただきました、文化経済学会韓国会長の姜應善先生、「九州のムラ」編集長の養父 信夫さん、薬膳茶房オーガニックごうだオーナーの郷田 美紀子さん、そして久留米大学経済学部の駄田井先生です。まずパネリストの方をお願いいたしますがマイクを使ってお話をし、お話が終わりましたらマイクのスイッチをお切りください。そして、またお話をなさるときにスイッチを入れるというふうをお願いいたします。そして、フロアの方、皆様にもマイクをご用意させておりますのでご自由にご意見・ご質問をよろしくお願いいたします。それではこれから、藤原先生にコーディネートの方をお願いいたしましてディスカッションの方に入りたいと思います。藤原先生よろしくお願いたします。

藤 原 ありがとうございます。藤原です。貴重なお時間を頂戴いたしまして「文化資源と創造的な地域づくり—九州マネジメント」という、先ほど駄田井先生が基調報告をなさった事をさらに深めてみたいと思います。九州へようこそおいでくださいました。遠くからおいでくださった方々は、今回のこのテーマは、なんて傲慢なテーマだろうと思われたかもしれません。「九州マネジメント」本当にそんな概念があるのだろうか。あるや・ないや。そういう事をいろいろ議論で深めていこうと思っています。

今、河北秀也先生に、圧倒的な勢いでの基調講演を頂戴いたしました。河北先生が九州出身ならば、九州人はあれくらいのパワーがある話をするんだろうなと思われたかもしれません。まだまだ河北先生もお話足りない雰囲気ですらうと思いますので、このパネリストの一員としてお言葉を加えていただければと思います。

順番としましては、最初に郷田美紀子さんをお願いします。宮崎県綾町からおいで下さいました。全国的にもこの綾町というのが、どれくらい自然の財産、文化の財産を生かした街づくりを営んでいるか、その仕掛け人でした昔の綾町長の一人娘ですらうこの郷田美紀子さんに、綾町での日々の暮らしの様子を伝えていただきながら、綾町の取り組みの裏舞台や仕掛け。そんなお話まで展開していただければと思っております。続いて養父さんをお願いします。「九州のムラ」という独特な味わい、肌触りを持った雑誌がございます。私は愛読している雑誌であります。この「九州のムラ」というのがいったいどんな事を志した雑誌なのかお話ください。福岡では大変有名な宗像大社。今世界遺産を目指している大きな神社でもあります、宗像大社の宮司さんの息子さんだったという事を最近知りまして、精神的・神霊的なものの力を地域づくりにつなげていこうとなさっているのではないかと私は感じ取っているお方でもあります。九州ならではのアニミズムみたいなものを、ぜひ教えていただきたいと思っております。それから、お隣の姜先生は、韓国文化経済学会を代表するお立場として今日は参加していただきました。韓国は、韓流ブームで親しみや交流のきっかけを得ているわけですが、韓国での文化経済学会の活動がいったいどんな事を今、目標とされているのか、どんな成果に結びついていっらうのか、そんな韓国文化経済学会のお話をぜひ聞きたいと思っております。さらには基調報告をしてくださいました久留米大学駄田井先生、それから今、基調講演をいただいた東京藝術大学の河北先生に参加していただきたいと思っております。では、さっそく郷田さん、お話頂戴

いただけますでしょうか。

郷 田 郷田です。どうして私がここにいるのかなっと思ひながら、そう思っ
ていらっしゃる方も多いんじゃないかしらと思ひます。私の話を分かって頂く前に、
綾の事を分かっていただかなければ、私がここにいる理由は分かっていただけな
いんじゃないかと思ひます。綾町というのは、宮崎県にありまして、宮崎市から
車で国定中央山地に向かつて20キロぐらいですね。30分くらい車でとばせば綾町
という所につきます。何もない町でして、照葉樹林というのが日本一の広い規模
で残っているというだけの綾町なんですけど。昭和40年ですかね。今から41年前
ですか。その頃はどいう時代だったかという。東京オリンピックの次の年ぐ
らいですから、日本全体が大いに変わってき始めたという、どのように変わって
き始めたかという。先ほどは宮入貝かなんかがいて泳げなくなったと先生言われ
ましたけど、昭和35年くらいからですね、綾の川は、大淀川側の上流にあります
けども泳いだらいかんよと言われ始めました。どうしてかと言ったら農薬が流
れるから。農薬が流れ始めたのが昭和35年です。農薬を手に入れた百姓はどうだ
ったかという。こんな楽な農業はあるか、今まであんなに苦勞して草と戦い、野
菜作りも大変だった。農薬が手に入って良かったなって思ひますよ。機械化、
いろいろな機械が手に入って良かったなっ。こんな楽な農業ができ始めたって
思ひました。そして杉の山。人間にとっては杉の山というのは本当に大事
でした。日本人にとっては。お金になる木ですから。雑木の山なんて焚物山よっ
て。あんな山、誰が喜ぶかとみんな切って杉山に植え替えました。そして、お金
さえあれば電化製品が全部買えるというわけです。今まで朝早く起きてご飯を炊
いてたんですよ。それが電気釜で炊けるようになったし、掃除機も、それから
洗濯機も。洗濯も大変でしたよ。洗濯機を買えば洗濯も楽にできる。お金さえあ
ればなんでもできるって。みんなが喜んでいたのが昭和39年頃です。で、オリ

ピック期間中にテレビも普及しましたし、綾には2つ映画館がありましたけどたちまちにしてなくなりました。そういう頃にですね、綾町は公共事業のおかげで、ちょっとだけにぎわったんです。ちょっと前の日本と同じですね。バブルの頃の日本が綾にもありました。小さな小さな田舎町でしたけども、ちょっとだけにぎわったんです。

けども、工事が終わったらみんな去っていったんです。それで、どうなったかといったら、夜逃げの町になりました。私の家の前も、斜め前も、隣の横の家もみんな夜逃げでいなくなりました。それで、その頃にですね、父、郷田実が町長に就任しました。綾町は、非常に国有林が多いところでした。だから木こりさん達が非常に多い町です。切りにくい山だけども、たくさんの雑木の山が残って、あの山を切って杉の山にしようと思うと営林所の所長さんが来られたのが父が町長になって2ヵ月後でした。しかし父は、何の根拠もないけれども、それはならんと言ったんです。小さな町の町長が国に対して「ならん」と言う非常識はですね、本当にまわりからは気違い扱いだったし、本当に誰からも相手にされなかったです。国も、県も。町民の方々も自分たちの仕事がちょっとだけ潤うのに、どうして町長は町民のことを考えないで、あの山を切らせんというのだろうか。もう父の、うちの家ですね、石を投げて、夜中に訪れる人、斧を持ったり武器を持って押しかける人たち非常に多かったです。うちの父は町長になって町民の方々の事を思わないはずはなくて、俺はいっぱい悩んだと。本当に目先のことを考えれば切るの方がよかろうと。一つの企業が来たようなもんですから。けども、切ってしまった後には何が残るんだろうかと。

父は本当に自分のことではなくて、この故郷の事をすごく愛していました。命がけであの山を守ろうと。あの山を残す事の方がいいと。必死になってあの山を残しました。ところが、郷田実がその当時言ってましたけども、俺は、こんなに自然とか土とか山とか近い所に住んでいながら、実は山の事も自然の事も何も知

らなかったんだと。だけど、国と国の山の専門家と戦わんといかんから、こりゃあ、ものすごく理論武装せないかんと。それで、目が見えなくなるほど時間がなかったんで、目が見えなくなるほど、山とこの地球の成り立ちを自然の勉強をしたわけです。それで分ったのが40年前。森と海は繋がっていると。そして、思った事もなかったけれども。たった指先ほどの所にも何億という微生物がいて、それを食べる虫がいて、それを食べるミミズがいてという命の流れが土の中にできているという。そして、自然の山と雑木の山と山に変わりはないと思っていたけど。そうだ昔の人が言ってたけど、杉の山では鶯は鳴かんといっている。雑木の山には、小さな虫がいてそれを食べる小鳥がいて。そして、それを食べるもっと大きな鳥がいて。そして、土の草を食べる鹿がいて、イノシシがいたり。木の実がなる森ですから、いろんな生き物が生きられるけれども、杉の山には本当に鶯も鳴かんのよと。そして、自然の中の命っていうのは必ず死ぬのが自然であって、死んだ命は全部積もって行って腐葉土を作る。そして、そこに流れていった水が、実は海に流れて行って海の森を育てる。杉の山から流れる水、アスファルトから流れる水。そういう物は、海を育てる事はできない。そういうことが実は分ってきました。

それと、もう一つ分った事がですね、不思議なことに中尾佐助って言う人が照葉樹林文化論というのを発表したのが、ちょうど父が山を切らせないと反対運動をしたのと同じ年だったんです。だから、自然を守るという事と人間だけの、人間様だけの地球じゃないんだということと、照葉樹林文化論という2つの旗頭ですね国と戦って、照葉樹林の山というのは残されました。で、その理念武装をしたおかげで、その哲学のある町であるというふうに言われてきて、綾町は、有機農業をされる農業に詳しい方ならご存知と思いますが。認証制度というのを日本で最初に行った町です。それは、ひょこっとそういうのが起きてきたのではなくて、山を守るために理論武装したおかげで、自然生態系農業という自然の命を

大事にした農業にしないといけないんだという。だから、ちょうど農薬が入って楽だ楽だと言っている頃の6年目ぐらいですから、お百姓さんからはすごく嫌われたんですよ。有機農業の認証制度をやりましたところ、自分は百姓もしたこともなくせに有機農業なんて、その無農薬とかそんな事言うなんて、ほんと百姓泣かせの町長だと。だけど、必ずそういう本物が求められる時代が来ると、ワンマン町長と言われながら町づくりに取り組みました。今は、本当に綾ブランドというのができまして、綾の野菜を求める人たちが東京の神田市場でもですね本当に引手数多ですね。

残飯を集めて、それを堆肥にするっという事を最初に言った町です。それからおしっこもうんこも土に戻るのが自然であるというふうに言ってましたから、バキュームカーで汲み取って一箇所に集めて液肥にして土に戻すという、そういう方式も綾町は取り入れています。非常に、非常識と言われながら、街づくりの先頭をしてきたのが理論武装し哲学をかざしながら町作りをしてきたのが綾町です。

その綾町にですね、今から10年前、歴史はめぐるといいますか、ちょうど10年前に理念で固めたはずの綾町に鉄塔が。九電の巨大鉄塔、原子力発電所とつなぐ巨大鉄塔が建つと。16本立つ。町を取り囲むようにして建つ。という問題が起きたのが10年前です。その反対運動を10年間やってまいりました。反対運動をしながら気づいてきたことはですね、父がよく言っていましたけれども、逆縁の恩という事があると。逆縁の恩というのは、目の前で見るときには、これはたまたま本当に難問題だ。どうしようかと。その父にとっては営林署、国を相手の伐採問題というのは非常に大きな問題だったけれども、それを阻止させるために一生懸命戦うことで理論ができた、理念ができてそれにそう街づくりができた。私にしてみても、鉄塔反対運動をやっていくというのは、非常に苦しい10年間でしたけれども、その間に知恵がわきました。それは、反対運動では何も生まれなくてことです。みなさんに協力して、ついてきてもらう。一緒に乗ってきてもらうた

めには楽しい運動でなければいけない。本当のことも、あんまり本当のことも言いすぎて面白くなかったら誰もついてこないんだ。という事が解りまして。東京のサポーターが「郷田さん、東京の人が知ってニュース スリー・ニュース ステーション・天声人語、そんなのに取り上げる運動を起こしなさいよ」と。何をすればいいんだろうかと思いながら、宮崎で起こせそうもなかったので東京で世界遺産運動を起こしました。実は、この世界遺産運動は大成功でして、ニュース スリー・ニュース ステーション・天声人語にも取り上げていただいて、たちまちにして綾の森は非常に有名な森になりました。世界遺産なんてならなくてもいいんです、私の中では。鉄塔さえ建たなければよかったんですけど。でも、鉄塔は建ってしまいました。だけど、いつまでもそういう所にいないと私は思ってるんですよ。時間がないんです。森は今から何100年も生きていきますけど。私は後20年生きるかなっと思うと、建ってしまった鉄塔の前で座り込んでるよりかは、もっとほかの街づくりをしていきたいと思ってます。

幾度か行政に呼びかけられる事もありましたけれども、権力を身につけるとです、物が言えなくなります。それよりかは、対等な関係の力、仲間がほしいと。仲間をいっぱい作って、その力で上に物を言う。その方法で、今の街づくりに参加しています。今ですね、綾は、森林管理局が動き始めまして。国と県と、国が動きましたら、もちろん県も動きますから町も、自然保護協会と私達とで百年後の森を作るという、そういう運動が始まって。これは日本発のプロジェクトですけど、私はその会場で会議の所に行ったんですけど。こんな日本の端っこの小さな町で、そして国と県と町と皆がおんなじ心になって、森の事、森の動物たちの事、植物たちの事、そして流れていく海の水の事。そういう優しい会議ができるってすばらしい事ですね。ここになんか天上から光が降ってきている気がします。ということその時言ったんですけども、本当に優しい事が始まっています。あきらめないで、その時に言われましたけど。郷田さんはどうして非常識なの。い

ろんな所に非常識な事ばかり。県を相手に、国を相手に、企業を相手にとって
も非常識な事を言ってるじゃないのって言われますけど。私は全然、変らないで
すけど。周りが、国が県が町がいつか変わってくる時がきます。あきらめないで本
当の事を言ったら、仲間がたくさんいたら、それをやっていけるだろうと思いま
す。

藤 原 どうもありがとうございます。郷田さんの美しいお話は、先ほど河北先
生が、日本は国が汚くなった、あるいは久留米の町も、いかななものかとずいぶ
ん厳しいご指摘をなさった事に対して、私どもが突き抜けてきた近代をもう1回
振り返る、振り返り方みたいなことを示唆いただいたような気がします。後でま
た、ぜひ議論に今のお話を投げ込ませてください。続けまして養父さん、お願い
いたします。

養 父 「九州のムラ」の養父です。よろしく申し上げます。お隣の郷田さんと
は、先ほどちょっと皆さんにご案内していましたが、ちょうど「九州のムラ」の
16号のときに、『ムラの遺伝子』という特集で取材させていただきました。その
ときも思い出すのは、郷田さんは涙もろい方という事です。特集は郷田実という
お父さんがいらっしゃって、美紀子さんがいらっしゃって、そして息子さんがい
る。彼は今有機農業をやってらっしゃるんですね。森を守ったお父様と、今食で
いろんな事を伝えようとする美紀子さんと、農業をやられている息子さんと、そ
の遺伝子をどうにか皆さんに伝えたくて特集をやりました。たぶん、人に遺伝子
があって伝わっていくように。地域にも遺伝子はあるんじゃないかと思います。
その地域の遺伝子をちゃんと我々が分かった上で、その上で地域づくりをやるな
り民間さんをつながるなりいろんな事をやらないと、なんかそこが分断されてお
かしくなると思います。そんな事をずっと考えていたのですが。先ほど、コーデイ

ネーターの藤原さんと久しぶりにお会いして、控え室の前であなたの名前が神社本庁で出てきましたよと。僕の友人が、今あの東京都のゴミの島を100年かけて森にしようという千年の森プロジェクトの事務局長をやっているんですね。私の父の前の宗像大社宮司の息子です。宗像の場合は、宮司さんが世襲制になってなくてですね、いろんな方々が、つなげているという事なんですけど、私の父は宗像の先々代の宮司をやっていました。僕の中にもその遺伝子は実はあってですね。自分の中では、自分が今やっている「九州のムラ」と父がやっている神主の仕事とあんまり違和感がなくてやってるんですね。

せっかくの機会ですので、私の郷里の宗像をぜひご紹介したいと思いますが。宗像大社は、実は3つの神社に分かれています。沖ノ島という海の正倉院と呼ばれている神の島と呼ばれる島ですね、ここは未だに女人禁制を守ってる島なんです。別に女性差別をしているわけではなくて神様がもともと女の神様で、天照大神とその弟君のスサノオの尊との誓約によって生まれた3人の神様です。その3人の神様を、それぞれ沖ノ島、それから筑前大島村、それから皆さんがよく交通安全のご参拝でいかれる辺津宮本殿の宗像と3人の神様を祭ってあるんですけど。ちょっと余談になりますが、沖ノ島は今でも宗像の神主さんが交代で島を守るんですね。どんなに台風がこようと冬で雪が降ろうと毎朝禊をして政を行うと。女人禁制になってるもう一つが地域側の理由としてはですね、宗像は、海女さんの発祥地としての鐘崎を有しています。その鐘崎から海女さんがどんどんもぐって、全国に行かれるんですが。その海女さんは、場海女さんと潟海女さんと言う陸地からもぐる海女さんと、舟をこいで沖合いまで行ってもぐる場海女さんがいてすごく危険が伴うんです。昔は旦那が伝馬船こいで奥さんがもぐると。沖ノ島周辺は、すごくいい漁場なんですね。それで、どこまでもほっといたら鐘崎の女性連中は、もぐって行くぞっと。それで、大島村とか鐘崎の男衆がですね、あそこは女の神様だから、女は近づいたらいかんと。そんな話しも地元にはあります。

その宗像なんです、大化の律令の時代に公地公民制度という事で、すべての人民たちは国の物でした。その時に唯一全国7箇所だけは、今で言うと神様特区みたいな土地も神社の物だと認めても良いぞという地域があったんですね。それが、伊勢・出雲・香取・鹿島。後2つは忘れましたが、九州では宗像なんです。それだけ御神威のある地域で、神郡宗像ということで、今で言う宗像市、それから岡垣・福間・津屋崎。あのあたりまで大体神宮の領土だと。その宗像大社と神社を守る漁民たちはですね、海神、宗像海神族が、宗像七浦という、漁村を作ってるんです。その人たちが一堂に集まってやる祭りが、10月1日にあるみやれ祭なんですよね。宗像の女神、御霊を乗せた御座船を取り囲むように2,300船ぐらゐの漁船軍団が海上までパレードする。そういうお祭りを今もやってます。

僕もその土地柄に生まれながら、ずっと父の背中を見ながらですね。僕はどちらかという、そういう村社会から出たかったですね。こんな狭い世界に閉じ込められたくはないと。僕らはどちらかという、生まれたのは昭和37年ですから、まさしく日本が高度経済成長を始めたころなんですね。それで、東京でリクルートという会社に入ってしまったんですね、それはそれですごい人生経験をつみました。僕はこの仕事をやり始めたのは、一つ、10年間東京に行ってあの中でもまれてですね、マチはマチでいろいろ悩んでいると。で、ムラはムラで悩んでいるぞと。その時に初めて、マチにいることによってムラの価値がすごく自分の中で見えてきたんですね。自分の中では意識はしてなくて、もう一度このムラという概念をマチの中に持っていかないとマチが成り立たんぞと。逆にムラ側は、マチの経済という力を取り入れないと成り立たんと。つまり、両方がもうちょっと歩み寄らないとおかしい世の中になっていくんじゃないか感じていたんですね。「九州のムラ」の理念の中に、『ムラの命をマチの暮らしに』と、ムラの命って言うものをマチの暮らしにつなげたい。それから、『マチの力をムラの生業』へ。マチという経済の力を新しい生業につなげるためにつなげたいと。こういう2つ

の理念を1つに統合して持っています。

先ほど徳富蘇峰さんの話がありましたけど、僕の中に雑誌の「九州のムラ」と事業としてのムラ事業と、違う領域の部分をどう統合するかを日々葛藤しているんですけど。その、五木寛之さんも確か、彼もお母さんが筑後の八女の立花のご出身なんですね。で、五木さんが書かれている『この国のかたち』の中で、日本の国づくりの話が出ていました。昔は和魂漢才というか、かんながらの魂を持って中国大陸の文明を入れ込んで、日本という国づくりをずっとやってきた。それが明治時代には和魂洋才という、ヨーロッパ諸国の文明を入れて、でも気持ちかんながらの日本人の魂を忘れずに国づくりをまい進してきた。ところがその戦争に負けてですね、それが無魂洋才なんだと。アメリカの文明だけを取り入れて、日本人の魂をなくしてしまったと。そのなかで、彼は本の中で、宗教という部分の片一方のタイヤと、経済というタイヤの両輪がないと日本は回っていかんぞと。そこに政治というハンドルがあって始めてまっとうに進む。戦後の日本は、ハンドルも機能してない。宗教も機能してない。一輪走行の経済だけが、エンジンを使っちゃってダーツと行っちゃったと。だから、バブルもはじけたと。脱線したんだという、そんなことを彼は書いてたんですけども。

僕はこの「九州のムラ」という事をやりながら、そのもう一度、自然が持っているいろんな価値観。ムラが持っている家族とかですね、絆とかムラ社会とか、今まで戦後日本人が、これは前近代的だと切り捨てた物の中に実はいろんなヒントがあるような気がしています。日本の経済化と近代化というのはですね、ある意味、そういう家族とか村社会の持っているいろいろな機能をアウトソーシングして、それが企業がいろんな事業として展開して来た時代じゃないかなと思ってはいるんですが、どうも、それがだんだん破綻をきたしてて、もう一回そこに戻ろうとしている。今は、そういう時代じゃないかなという気がしています。先ほど河北先生が2020年に、何か大きな意識の改革が起こるぞっと。僕もなんかそうい

う気がしてるんですね。僕は「九州のムラ」をやり始めて、その神社本庁の彼に紹介された方で、ハウステンボスの元会長をやられている池田さんという方がいらっしゃいます。日本設計の会長さんをやられた方なんですけど、彼がいろんな話をされたときに、その時は最後のリゾート時代だったんですけども、『今までのリゾートっていうのは、日本の自然を壊して、そこに経済の概念を入れてリゾートを作ってきたんですけども。自分がやるんだったら、日本が作り上げたその技術力を持って、日本人が壊してきた自然と経済を共生させた一つのプロジェクとしてやりたい』と。それで、確かあその場所は海軍の演習地で、草木一本生えてない不毛の土地をあえて選んでですね。そこに4メートルの盛り土をして、4万本の木を植えて、そこで経済と、いわゆるエコロジーとエコノミーとテクノロジー。この3つが共生する装置として、彼が神近さんから相談を受けたときに、その考えか方の中で作ったという、そんな話をされてました。

その池田さんが、もう一つ環境研究所の所長という肩書きを持ってたんですよ。ところが池田さん、これなんですけど。そしたら彼が、ここには400万人くらいお客さんが来て、4千人くらい従業員がいて、その経済活動の中で出る大量の二酸化炭素を自分が植えた4万本の木が具体的に何パーセントCO₂を吸収するのかというのを分析しているんだと。それを数字で表す。数字で表すことが大事なんだと。わし等の世代は、その当時彼は、うちの父と同じように70代なんですけど。「わし等の世代は、そういうことを数字で表さなくても、要するに人間と自然がどういうふうに折り合いを付けてやってったら良いかという事を感覚で分ってた。ところが、わし等より下の世代はあまりにも経済一辺等でバーッと行き過ぎたから、数字で説得せんと理解せんのやろうと。だからわしは、それをやっ取る」という事をおっしゃってたんです。あんたの雑誌は、わしらの言葉を繋ぎなさいって言われたんですね。わし等70代の世代は、自然と共生して第1次産業中心に生きてきて、自然からのメッセージなんかもちやんと分つてると。わしら

の言葉が大事になる時代が必ずこれから来ると。ところがわし等は、これから10年20年生きられんと。それを次の世代に、あんたなんとか「九州のムラ」で伝えろと。

その池田さんから言われたのがすごく自分の中にあってですね、それで、僕の雑誌には爺さん婆さん結構出てくるんですが。で、今すごく時代の分かれ目なんですね。僕らの世代は、かろうじて村社会の言語も分るんです。爺ちゃん婆ちゃんとも会話ができる。村社会の中で小さいころ生きてきてきましたから。かつ、今20・30代のITの世代にも会話をする共通言語を持ってるんですよ。もともと僕らの世代はITの走りの世代ですから。だから、楽天の三木谷君とか大阪USENの宇野君とか、大体同世代のですね、だから僕が思っているのは、その両方の世代を繋ぐ役割だと思ってます。それから「九州のムラ」を通じて、マチとムラをどうつなげていくかと。

最近、ここ半年くらい特に身の回りで起こってるのがですね、いわゆる民間サイド、行政の助けがなくて民間側からもムラとなんとか繋がりたいというアプローチが、今来てるんですね。彼らもある意味一つ、なんかこう飽和感というか行き詰まり感というものがあってどう展開していくかと。その中で、最初の切り口になるのは食と旅という部分から、アプローチが入ってるんですが、そのまま繋げちゃうと、村側は消費されるだけの危うさを持っています。結局大きな環から捨てられて終わっちゃうと。それをどう消費されずにやるのかというマネジメントの世代に入ってくるんですね。それで、この前、種子島のグリーンツーリズムの研究会に呼ばれて、講演に来てくれということで行きました。行ったときにその黒砂糖の工場に連れて行ってもらったんですね、現場の人から。そうするとその、昭和30年代からずっと繋がってる技術を持ったおっちゃんたちが、大体平均年齢70歳ぐらいのおっちゃんたちが6～7人ぐらいで、阿吽の呼吸で昔ながらの黒砂糖を作ってるんですよ。そのときの原材料になってる、とうきびは7年物を使っ

てらっしゃってですね、しほりたては、そのままジュースにしたらおいしいと。そういうものを使って、昔ながらの作り方で作ってる黒砂糖でした。本当に質が高いんですね。そこにたまたま、僕らが取材に行っているときに東京のインターネットでいろいろなサンプリングを紹介するネットバイヤーみたいな専門家の人も一緒にいたんですよ。彼は、当然物が良いか分かってるから、当然それを東京で紹介していきます。その夜、交流会で地元の生産者の方たちと一緒にになったときに、彼らと繋がるとあんなたちの分の黒砂糖もなくなるくらいあっという間に物は売れるよと。でも、それで喜んどったら本当に消費されて捨てられるよと。で、彼らの価格設定はあくまで島内価格なんですね。島での直売所で地元の顔の見える人たちの値段設定なんですよ。じゃあ、東京で島内価格で売った時には、あっという間になくなっちゃうんですね。じゃあ、マチで売るには、マチで売るための価格設定、マネジメント、パッケージデザイン、そういう戦略が必要になってくるし、そういうものを地域地域の中でやらないかと。水俣は、たまたま福田農場の福田さんという方がいらっしゃるからその視点でやれと。岡垣だったら「ぶどうの樹」の小役丸さんがいるからやれると。そういう地域マネジメントをどこでやっていくのかという事を悩んでいることなんです。経済としては、ムラとマチというのは本当に繋がろうとしてるし、でもムラが消費させられないためには、ある意味、そこを解かった上でマネジメント、地域の資源を分った上で、ムラの遺伝子もちゃんと分った上で組み立てていく。そういうかなり高度な事をやらないといけません。でこれは、その後はこの後に議論していきたいんですが、なんか、そんな一つのきっかけ作りが、これからやれるような時代には、なってるんじゃないかなというふうに思います。

藤原 ありがとうございます。遺伝子を嗅ぎ取る力、おそらく神がかりぐらいの力的なことが、養父さんの中には、あるんだと思いますが、こういった力を逆

に村，あるいは街をつなげていく。そういう現場で使いたいとおっしゃってくださいました。期待したいですね。じゃあ，お待たせいたしました。姜應善先生，よございますでしょうか。

姜應善 皆さん始めまして。私はソウルから参りました。姜です。あらかじめ藤原さんから，私の場合は，時間の限界はないといわれました。それにしても，時間が長すぎると教えてください。その前にね，資料の私の自己紹介でね生まれ場所が間違えましたね。このまま認めると，私帰ってから，父親にしかられる。韓国の1949年のね，光州ですね，光州。有名なところです。反対側ですよ。この慶州という所は。

私，去年，米子市ですか，その時参加したんですけど，なんとか考えていきたいと思います。10年前1996年と思いますけど。札幌の小樽ですよ。池上先生がいらっしゃれば，その時参加してからね，こういう学会ができるんじゃないかと思って，出来上がって1997年。文化経済学会を作りました。もう，10年たちましたけどね。なんとなく，毎回僕は来てね，日本の学会，羨ましいです。何かというと，この日本の学会と比べて，いくつかね弱点が韓国にありましてね。まずね，会員の数がなかなか増えないですね。最初，発足ですね，約100名くらいいましたけどね，どんどん減少してね，今，正直に言えば50名くらいしかいないですね。なぜかという初めはですね，3分の1ぐらいは経済学者。それから，3分の1ぐらいは文化経済の分野で働いている人。それから，3分の1はですね，関連政策を作る公務員とか研究者とかそういう人で構成されましたけど。なかなか，経済学者の人が残ってほかの人は現れないですね。だから，それを比べるといつもこんな，人数をちょっと数えましたけど200名以上参加して恨めしかったですね。

それから2番目がですね，我々は，地方の組織ができないんですね。ここは，九州組織がありますし，魅力的ですよ。もちろん日本の面積と比べて3分の1ぐ

らいで面積も少ないですけども。今までも韓国では、日本でしたら、60年代・70年代でしたね。田中首相の日本列島改造計画ですね。ソウル中心に首都圏に何でも集まってるんですね。専門家たちも大体80%ぐらい。科学だけじゃなくてね、頭のある専門家達ね。それから財政力・経済力、全部のソウル中心に首都圏にありますからね。学会を地方に召集するのは難しいです。他の学会も同じですね。ですから、昨年米子市、今年この久留米市ね、本当に羨ましい事です。

それからね3つ目がね、今日のテーマは、地域づくりですよ。文化資源を利用してね。我々は今までね、経済学でいうと、マクロなテーマだけを取り扱ってきました。ミクロ的なテーマは、まだいけないですよ。それと、推し進めると、文化産業の種類によって、例えばね去年は、映画産業とか、一去年は、音楽産業とか。こういう分野によっては進めてたけど、こういうふうにねミクロ的なテーマ取れないですね我々は。それも弱点の1つです。それがおおむね韓国文化経済の現状です。

今からはちょっと変わると思いまして、それはなぜかという。ご存知かもしれませんが、韓国が1997年このアジアを中心とした外貨危機。いわばIMF危機が、それがあって、経済が悪くなって、その時ちょうど新しい選挙が出て、大統領に出た人が金大中になった。日本では有名ですよ。拉致事件でね。その金大中の大統領のときね、韓国の経済危機を克服するためには、今までの製造業より新しい成長動力が必要だと思う。それが成り立っているのは文化が中心でね。直接言えば、文化産業を中心に経済を回復すべきだと。それと、具体的な数字まで出てるんですよ。例えば、毎年文化産業から、40万人の働き場所を作ると5年の任期ですからね、200万人のエンプロイメントができるというそういうお話。国権の政策の目標ですよ。それからね、ちょうどその時、インターネットを含めたITの発展が支えて、それからバイオテクノロジーとCT (culture technology) 等、五つのテクノロジーとして進めたんですよ。

それがやっぱり効いて、それ以外にね、日本と韓国の大衆文化の交流を進めたんですね。その時反発が多かったですね、国ではね。今考えると6, 7年過ぎましたけどね。その時反対した理由、全然当たってないですね。例えばね、日本の音楽とか映画が韓国に来ると、韓国映画はなくなるだとか。反対ですよ。でしょ。藤原先生は韓流とおっしゃいましたけど。日本だけじゃなくてね、アジアの国々でね、韓国のドラマや映画が流行しているんですよ。それを見ると反対の結果です。

2つの政策の選択は、よく効いて。例えば、去年の韓国の経済成長率はね、4.7%でした。文化の分野の成長率は、15%ぐらいでしたもんね。付加価値でも、効用にしても、よく聞いてください。それを見ると、これからは、先ほど駄田井先生がね、日本の場合、大体1989年ぐらいですよ。そこから、経済の中心を製造業から文化へ変わると。おっしゃいましたけれども。それがきっかけになって韓国でもなかなか、製造業より文化を中心として、企業はもちろん国の目標でもそういうのを選ぶんじゃないかと思います。

今日のテーマがね、地域の文化資源がどういうふうに関域づくり、いわば地域の発展ですよ。発展に役に立つか。そういうことです。私ここに来る前に、韓国の事例を調べまして。それを中心に申し上げます。日本ではずっと昔から、地方自治制それがありましたけど、韓国では、1995年から始まりました。ちょうど先月、4番目の選挙が終わりましたがね。ちょうど10年たちましたから。まだ、ちょっと歴史が短くて。地域単体の自分の力で、なんとか文化資源を利用して地域作りをですね、成功から見るとね、成功の事例から見ると少ないです。まだ進んでいて。失敗のほうが多くて、成功のほうがまだ少ないです。その中でも、いくつか例を挙げると。例えば地域の伝統的な儀式、あるいは習慣・慣習を利用して、文化資源を変化して、それによってその地域を発展に向かったこと。例えば、慶州。ご存知ですよ、韓国の。ずっと昔の1000年ぐらいの首都ですよ。

ここで言うなら京都みたいなものですね。だから、慶州、それはただの観光の対象じゃなくてですね、今慶州では有名なマラソン大会があります。もう10年くらいあったんじゃないかな。それは、日本の放送でも同時中継放送を、よく私見に来てたんですけども。マラソンね。マラソン大会ね。だから、それをかけて慶州はね、多くではないけどね、少なくない金額。観光とかでね、いろいろもらっている。それから慶州の隣にね、青道と呼ばれる久留米市ぐらいの人口がある市がありましてね、そこがね、闘牛、牛の戦いが有名な場所なんですね。そこではね、今15年ぐらいたちましたけどね。びっくりしましたけどね、それは4日ほど行きますがね、その時儲けた地域のお金で、1年分はいかないが、半年分のね、その地域のお金を儲ける。というふうに聞きましたね。成功した場合ですね。

例えばね、ここに行かれた方がいるかもしれませんが、スイス、スイスのダボスと呼ばれる小都市がありますよね。小さな町ですね、都市じゃなくて、ダボスではね、世界経済討論でね10日間行われましてね、その大会だけで、そのダボス地域は、1年の生活費を儲けます。そこまでいかないけど青道の闘牛はね、すごいぐらいに成功したと。日本でちょっと調べるとね、例えば、群馬県の子持村でしようかね。そこで、黒井峰遺跡巡回マラソン大会。私、ちょっとホームページ調べました。反応がないから失敗かもしれませんが。それから京都府川町の古墳公園。これも私が調べる限りでは、同じぐらい成功しています。それから、工芸品を文化産業として成功した例を挙げます。これは有名なところですが、韓国で。イチャン・ファンズ。あの、利益の利と川ですよ。それと広州。同じですが、初めの漢字がね、私の地元は光ですけどここは広いの広州ですよ。それから大体、ソウルから渋滞がなかったら30分、車で。渋滞があれば1時間かかりますけどね。そこで、陶磁器エキスポ。陶磁器エキスポが2000年から始まってね、もう盛んになりますよね。国内の人々だけじゃなくて、海外から観光客はもちろん、専門家、それから陶磁器に興味を持っている方に体験させていろいろやっています。もう一

つの要因はね、ここは昔から有名なお米の生産地ですね。王様が、食べるですかね、王様が食べたと言うと失礼じゃないですか、日本語で。尊敬の言葉で、召し上がった。王様が召し上がったお米の生産地。その有名なところが、それをかねて、陶磁の生産でねエキスポで自慢したような。この地域はね、お金もどんどんですね、日本で言うと、隣の佐賀県の有田と同じくね。

それから、文化行事を成功とした事例が、3箇所ありましてね、とりあえず釜山国際映画祭。今年3月ですか、4月か、もう終わりましたけどね。特に海外から参加している映画家である人とかが韓国に増えて、やっぱり、国内の人より海外の人がもっと集まったほうが、この地域にとって役に立ちますよね。もう、黒字になったのはもちろん、今では、アジアで一番有名な映画祭になったといえるでしょうね。これは、我々の口じゃなくて海外からそういわれるんですからね。それから、慶州の文化エキスポ。それから私の地元の光州ですね美術展、2年ごとでね。それも成功してますね。日本だったら、世界ポスト展が富山県で、それから高知県で漫画オリンピック大会とか、北海道の戸谷村で国際彫刻展がいろいろありますよね。あんまり、日本ぐらいはできないけどね。こういうふうな地域づくりは韓国では成功しつつあるんですよね。

それから、生活文化も、主には食べ物、衣服を中心にそれを資源として成功する場合も。一番有名なものはね、ビビンバですね。日本でビビンバいっぱいあるでしょう。じつは、ビビンッパですけどね。それから、全州。光州の上。その全州で出せるものはね、それを食べに行きながら他の物を見られたりね。今、ここでテ・ジャングムというTVドラマが流行ってるんですよね。ジャングムですか。これね、そもそもここから始まったんですから。これは日本にないと思いますけどね。

韓国では人物を文化資源として成功した場合がありますね。もちろん歴史的な有名な都市ですね。例えば、李舜臣。これは豊臣秀吉さんが朝鮮半島を侵略した

とき、おさえる海軍の提督ですね。その李さんが生まれた場所は、単なる歴史的記念物ではなくて、それを中心にですね、観光、スケジュールなんかを作ってます。お金儲かるですよ。それから、この人名前初めてだと思いますけど、ホンギルトンといわれる人がいてね、これには面白い話がありまして、ちょっと伝えたいですね。この人は、朝鮮政権の時代に、政権の腐敗とかスキャンダルに対してね、反発した。庶民などを動かして、反乱みたいな事をやりましたけどね、だから、政権から見ると犯罪ですけど、庶民たちから同意させる人です。そのホンギルトン。生まれる場所と育っている場所が違います。河北さんが生まれると、育てるのは久留米市。この人はですね、生まれてからすぐ他の場所に移って育てるから、普通これは、地域観点からこの人は、我々が観点だとね、それから、チャンソン（長城）とカンノン（江陵）と言われますからね。今、この人の文化資源は、2つの地域単体で行っています。だから、地域が分かると成功は難しいはずですよ。これは、私が言うと失敗の場合です。

それから、これはちょっと必ず述べたいですね。地域の農水産物を文化資源として成功した場合ですね。これは、私は限界があると申し上げたいです。例えば、塩漬けを干したもの、イシモチ、かぶ。有名な食べ物ですよ。それから、唐辛子の味噌とかね。でもね、これは、最近になってはね、なかなか減るんですよ。なぜかと言うと3つの理由が挙げられます。宅配便が発達しだすとソウルからそこまで行く必要はないですよ。それが1つ。2番目がね、交通の発達。今2年前から韓国で新幹線出てますよね。新幹線が出るから、機会ができます。あまりそこに止まっている必要もないし、お金も必要ないですよ。それが2番目。3番目がね、ある魚の場合がね、これはイシモチですね、一番有名な魚。中国漁船が捕らえる魚を、すぐ韓国漁船で電気製品と変わるんですよ。それをもらった韓国漁船は、それを韓国製だと言って偽物を出せるから、それを心配している人はあんまり数量が減ってるんですよ。だから、これから地域の農水産物を利用

して地域づくりをするのは、韓国では難しい。と私訴えますね。

それからね、最後にね、最近の事です、有名な映画、TVドラマの撮影場所を活用しての地域づくりですが、これも限界があるんですよ。なぜかと言うと、あるドラマが流行になると、それを超える新しいドラマが出ると韓国で人はね行かないんですよ。知れば多いですよ。時間が足りなくて話せないですが。それから、もうこのぐらい。ありがとうございます。

藤原 姜應善先生ありがとうございます。つまり、ふんだんに文化資源が発掘されている時代になってきたと言う事をお伝えいただいたのですが。ただそれを、具体的に次のステージでどう生かしていくかということに関してはまだ課題が残っている。そういうご報告だったと思うんですよ。

先ほど、河北先生がこういう研究活動。あるいは学会活動はどうしてもいろいろな公平さが前提にあるんで、むしろもっと一人一人が突出すべきだ。やりたい事をやってみようよと呼びかけてくださったんですけど。そういう意味では、一番やりたい事をやっているのは駄田井先生ではないかと、どんどん証明されてきているわけですけど、好きな文化経済学科まで作っちゃったというですね。その駄田井先生にですね、ぜひ裏話を教えていただきたいんですが。今日のこのパネリストは、全部駄田井先生が選抜していただいたんですよ。いったい、九州マネジメントというのを深めていくのに、このパネリストを選ばれたなにかこう駄田井先生の見論見と言うか、そこら辺もぜひ教えていただけるといいでしょう。と同時に、大阪からいらっしゃって、もう35・6年の久留米在住でいらっしゃると思うんですけど。いかがでしょうか。とも遠方から来てあり、いつのまにか久留米人になっていらっしゃると思うんですけど、内外から見たこの久留米界わいの魅力みたいなものもぜひ先生目から、私ども今日集まわれた、このたくさんの方々にお伝えいただき。さらには九州マネジメントの方法などが実際可能なのだから

か。一種の駄田井先生の、何かこう駄田井構想と言うのかな。そういった事をですね、お教えてください。

駄田井 私の方まで話が回ってくると思ってなかったので、気楽に一生懸命聞いてました。まず、このシンポジウムの事例では、できるだけ地元の事例を話していただくとうしました。地元に着した話をしていただくとう。パネラーには、どうしても九州全体の視点に詳しい人に、来て頂こうとうということで、養父さんと呼ばせていただきました。韓国からは、先生が来られますので、韓国から見て九州どうかとうということで選ばせていただきました。そして、河北さんは久留米出身で久留米から出られて、久留米あるいは九州全体をどう見ているのかとう事からお話いただきました。後は、郷田さんはですね。男ばかりではいかんだろうとう。そしてまた、九州の南の方が欠けてるんじゃないかとですね、南の方で女性とう事で郷田さんに白羽の矢があたりまして。非常に良い人選だとう思います。コーディネーターも藤原さんは、私と違ひまして標準語できれいだし、コーディネーターにうってつけではないかとう思ひまして、お願いさせてもらひました。

それと、やりたいことやってきたとうわれますけども、そういうことでもないんですけども。とにかくあの、最近私のやりたいこと言うよりも、郷田さんが先ほど言われたこと、苦しいとか、楽しくない事を言っても人はついてこんとよと言われたわけですね。楽しい事やりながらやっていかなきゃいけないよっと言われました。それには実感が持てますし。私最近言ってるのは、今まで日本はどうもですね、よく学べよく遊べとかですね、仕事だからけじめつけろとかですね、仕事だから遊びながらやったらいかん。とかですね。遊びと仕事と学びとうのを別々にしとったわけですね。僕はこれはいかんとう思ひますね。やっぱり人間とうのは、遊びと仕事と学びは一体にせないかんと。成功している人はそうですね。遊びと学びと仕事を一体にしてる。例えば野球のイチロー選手もですね、

イチローさんにしても、たぶん河北さんも同じと思いますが、芸術家とかそういうことで成功している方は、学者とかもそうですよね。ノーベル賞とかもらった人は研究している事を苦しいとは思ってないはずですね。楽しくてしかたないと思ってやってるわけですよ。松下幸之助さんも商売面白くて仕方なかったそうですな。そういう事が大事で、これがやっぱり長く続く事だし良い物ができることになる。遊びだから本気になるんじゃないだろうか、仕事やったらこの辺でやめとこかっという事が出てくる。そして今、自分達の中で、九州の人と独立とはどうかという話をしていますけども、これも半分遊びで楽しみながらやっています。

そして最近、なんか知らないけれども道州制とか言い出しましてね、そういう方向に向かっております。私は、九州にもともといたわけではないですが、どうも九州の人って東京見過ぎるんではなかろうかと思ったんですね。九州というのは、東京よりも古い歴史を持ってるし、歴史的にもアジアと非常に強い関わりがあるので、やっぱり東京ばかり向くんはやめようやないかと思うんです。九州独立論というのはある意味では文化独立論です。そういう観点から九州をこれからどうやっていくかを考えるべきではないかと思っています。

藤原 ありがとうございます。

駄田井 ちょっとたらなかったかな。

藤原 いえいえ。十分ですし、議論のきっかけを色々頂戴しております。あの、河北先生の順番がようやく回ってきたんですが、河北先生は先ほど聴衆の皆さんの期待に沿うような「いいちこ」の河北だっという説明をされたのですが、私どもデザインとか建築の世界の人間にとっては、むしろ「いいちこ」以前の地下鉄の河北って言うのが、私の中では忘れられなくて。あれだけ複雑怪奇な東京の地

下鉄を一つのマップの中で情報化してみせる。しかもそれを極めて分かりやすく私どもに伝えて見せる。ある種のコミュニケーションをデザインするという事をおやりになられた最初のデザイナーでいらっしゃると思うんですね。ただその作業というのはやはり東京というその得体の知れない所へ出て行かれた、かつての河北少年だからこそやれたんじゃないか。そこにおそらくありしも、東京を相対化するようななんか底力みたいなものがあるってその地下鉄路線図って言うものができたんじゃないかと私は、実は内心そういったことから来る河北先生に対する関心ってというのが昔からあったんですけれども。

今、九州久留米にお帰りになって、公平な“らしさ”を大切にする学会。とても複雑怪奇な場所に今いらっしゃるわけですが。先ほどお話いただきました、話にさらに何か輪をかけて私どもを挑発してくださるような、そういう話題をまた加えていただけますでしょうか。

河北 はい。地下鉄路線図の話が出ましたけども。地下鉄路線図ってというのは僕が、大学の卒業制作でやろうと思って結局難しくてできなくて、卒業して1年後くらいにできたもので、皆さんも東京にいらしゃった方は、ついこの間まで使われていましたから、見せればわかると思いますが、持ってるかな。ちょっと小さいですが、これですね。年間1000万枚ぐらい発売されてますけども、これはデザイン料は一銭ももらっていません。それであの、これがデビュー作ならデビュー作なんですけど。これ別に当時、評価されたわけじゃなくってですね、先ほど、なんか意味があって作ったんじゃないかといわれたんですが、全然そんな事はないです。僕は、鉄道ファンでして、西鹿児島から東京まで駅名が言えたんですね。小学校2年生ぐらいから、時刻表は完璧に読めました。それで、東京に着いたときには、高校卒業して東京に着いたときには、山手線は全部言えるんですよ。もう既に。山手線はですね。しかし、地下鉄が分からないんですよ。で、これは

僕は、鉄道ファンだし。要するに、田舎から出てきたおじさんでもある程度分かるような路線図を作らないとだめだなと思ったんですね。上野の藝大の前にちょうど、営団地下鉄の本社がありまして、今は東京メトロですけど、それで藝鉄道デザイン研究会って名刺作ったんですね。僕1人なんですけどね会員は、作って、広報課にいったら、お願いしますと言って作ったんです。そしてデザインしたら、完全僕のために作ってますよね。僕が分かればいいという事で。それで、いいよ採用するよと。駅に置かしてやるから裏に広告かなんか取ってきて自分で印刷して持ってこいって。大学を卒業したばかりですから、広告代理店みたいな仕事をやらされたんですね。分かりました取ってきますと言って、ほんとに取ってきたんですね。アルバイトみたいな仕事やってるメーカーから。取ってきて地下鉄においたんです。だから完全にプライベートで作ったんですね。

いわゆる、こういう学会も非常にソーシャルな学会ですね、ソーシャルっていうのは嘘です嘘。どれだけプライベートな物をパブリックにできるかっていう事が重要なんですね。この地下鉄路線図にしてもプライベートで僕が作ったものなんですよね。それがパブリックなモノにいかになっていくかってことが、デザインにとってものすごく重要な事なんですよね。それを今までやらなかったんですよ。これがあると企業が儲かるとか、他の意味でモノを作ってるんですよ。これがあるといいとか、自分や人のためではない。自分が本当にほしいベンチなら良いベンチを作らなきゃだめですよ。座ってみたいベンチを。それが本当にいいものだったらパブリックに通用しますよね。だから、パブリックっていうのは公衆って言いますよね日本では、公衆っていう意識が、個人を生かす。意識が非常に重要なんですけど前はそうじゃなかったんですね。非常に社会という事を考えて、それがパブリックになるかっということを考えたんですけど。本当は逆ですよ。だから、パブリックっていう概念が必要なんですよ。パブリックっていうのは、プライベートをいかに実現するかなんですよ。それをパブリックっていうん

ですよ。例えば、公衆便所って言うでしょ。社会便所って言わないでしょ。公衆浴場って言うでしょ。社会浴場とは言わないじゃないですか。皆プライベートの大事な事を実現するためにいってるですよ。だから、さっき言った、やりたい事をやれって言う。別に勝手にやれって言ってるんじゃないですよ。プライベートを本当に実現するためにやるために、身勝手にやる人なんて誰もいないですよ。まかされると本当によく考えてやるんですよ。そうなってくると。

だから、エデュケーションで、エデュケーションって教育って訳されますよね。これが大体間違いの始まりなんです。この教育する場。久留米大学ですから教育する場なんですけど。エデュケーションを教育って約したのが間違いなんですよ。エデュケーションを明治時代に教育、教え育てるって訳したから間違えたんです。エデュケーションというのは得意な所を伸ばすって意味なんです。その人の能力のある部分を伸ばしてあげる、伸ばすって意味なんですよ。教え育てるんじゃないんですよ。そういう事っていっぱいありますよ。英語の単語の話をしましたけども、英語を、明治時代に翻訳して間違えたものっていっぱいありますよ。パブリックって概念はそんなに知らないって思うんですよ、正確には。だから、英語の単語数が日本語より3倍多いって言うのも重要な意味があるんですよ。英語の意味を訳してますからね。

藤原 ありがとうございます。それで言えば、「マネジメント」という言葉も、私の友人のアメリカの日本学者が、あれは暴れ馬を調教する事が語源なんだと教えてくれた事があります。そうしていくと、利用していく私達にある目論見とか、到達するイメージがあってマネジメントをやっていくのが本当なんですよ。けれども。私たちの議論の枠組みが弱くなっているような気がします。いかに公平な価値みたいなものを作り出すかということが、説明責任としてもものすごく重要な役回りになってます。巨大な劇場とか巨大な文化施設は、やはり暴れ馬で

して私どもの目論見通り動かない。だからこそ、そのマネジメントみたいな力が必要だと議論していかなければならない。この点は、会場の皆さんと議論を深めていかなければならないと思います。

それともう一つ。九州はアジアとの関係が重要だ重要だって、内外から言われてるんです。でも、私は、お隣の韓国との関係は兄弟のような形で深めていきたいと思っているんです。でも広くアジアって見たときに、もっと向こうのアジア、かなたのアジアもあるわけで、全部に対して同じように付き合う事ができるのだろうか。そのような力が私達にあるのだろうかと思っていたら、吉本隆明が以前、九州に対して、ある洞察を与えた事があります。「九州ってのは、実はアジア的ではなくてアフリカ的なんだ」と言ってるんですね。旧来の日本の枠組みでは、まったく御する事のできないような地として九州ってのはあるんじゃないか。私は、九州生まれの九州人間です。阿蘇山の中腹が実家なんです。そういう立場で、駄田井先生が、挑発されました「九州マネジメント」あるいはアジア、この方法論はいかなるものやっと言うことに対しては、ぜひ会場の皆さんと議論をしていきたいと思っています。時間が残っておりますので、ご質問とかご意見という形でパネリスト・パネラーの皆さんに投げただけければ深まるのではないかと思います。いかがでしょうか。

どうぞ養父さん。パネラーの皆さんもどうぞご自由に。

養 父 今日地域産業という事で、九州は一つという事で、例えば観光一つとっても、なかなか動かないですね。九州観光推進機構という組織はできたけども、これはどっちかという行政主導で、実際は各県の利益優先で一つにはならんぞという。この前、韓国の学会、農村学会に呼ばれました。僕も韓国3回ほどお伺いしたんですけど、グリーンツーリズム一つとっても凄いんですよ。国の予算のつけ方といい、その進め方といい、あっという間にツーリズムというか観

光の方に持っていくという力強さは凄く感じました。例えば、僕らがある学会のときに、大麦畑を景観作物として植えてですね、そこに何十万人、何百万人観光で人を呼ぶんだと言う、その力強さは韓国にこれは凄いなと思った部分と、これは九州で展開したときになかなかこうはならんだろうなという思った部分がありました。

僕の専門は、実はツーリズムっていう部分なんですけど、例えば九州全体で見たときに、ツーリズムの主要になるエリアがあるんですね。僕は実は、藤原さんの出身の近くの阿蘇の所で、阿蘇遺産というこういう本を作りました。これは、阿蘇地域振興デザインセンターの坂本さんと一緒にあーじゃこーじゃ言いながら造った本なんですけど。実はこれ組み立てるときにですね3つ考え方があって、阿蘇が持っている『歴史文化遺産』、それから『自然遺産』。もう一個、『暮らしの遺産』という概念を入れ込んで。それをもうちょっと細分化して12の項目に落としていったんですね。自然遺産だったら、カルデラだとか、草原だとか、巨樹巨木だとか、水だとか。で、その3つ大きな枠の中で、細分化した12の項目を、今度歴史的な、歴史の流れの中にストーリーをつけました。これ1冊読んだら大体、阿蘇の事は内外の人は分かるぞと。そういう九州の歴史文化暮らしの遺産に、なんとか遺産とつけれるエリアが次の中にいくつもあるんですよ。宗像もそうです。宗像も宗像遺産。それから国東であれば、例えば、ヘリテージツーリズムという概念の中で。あそこは、仏閣を中心としたヘリテージツーリズムで発展するつもりだと、国東遺産だと。例えば宮崎県なんかだと、今、神話街道という古事記、日本書紀の歴史的な部分を何とかツーリズムにつなげようじゃないかと。そこなんかも、遺産がそのままツーリズムにつながるような、これは、まさしく神社というヘリテージ遺産をどう観光に結びツーリズムに結びつけるかということです。今度は、天草とかですね長崎の平戸、五島列島なんかも含めて、こっちは教会の世界なんですね。教会という歴史文化遺産を、どうツーリズムという概念の中でやってい

くかど。そういうヘリテージツーリズムの部分とグリーンツーリズムとエコツーリズムかブルーツーリズムとか自然系のツーリズムも、それは大分だったり松浦党の長崎だったり。エコであれば従来の自然公園のある阿蘇だったり、雲仙だったり、九重だったり、霧島だったり。そういうものをずうーっとプロットしていくと九州は一つの新しいツーリズムで考えるときですよ。

ツーリズムの産業で考えたときには、九州は一つのマップが出てくると。産業を考えるときに、今、地域で新しい産業と新しいムラの中に生業をとというふうに考えたときに。今、一番取っ掛かりとして入りやすいのは、こういうツーリズムという部分と、食の部分なんですね。そこに今、民間の人たちもムラの人たちもつながる共通言語をもっとるぞっと。それを、どう作っていくかというのが、自分の中で、すごく日々考えてる所なんです。例えばあの、「九州のムラ」で地元学を吉本さんと取材しました。あの、郷田さんのお父さんとも凄く懇意にされてて。これは、まさしく地域の宝を外の理論を使いながら、地元の人たちが地元の言葉で掘り起していきましよう。そこには、人も資源だ、景観も資源だ、歴史も資源だ、ありとあらゆるものが地域の資源になってくるといふ。この地元の人たち賛同型の街づくりの一つの手法なんですね。でも、これだけでもなかなか起こらんわけですよ。これは、地元に住んでる人たちは、それによって元気にはなると。でも、そこから経済につなげていくためには、もう一個別の次元の、もしかしたら民間的な手法だったり、ちょっとこうムラにデザインという概念を入れたり、そのへんはぜひ河北先生にお聞きしたいんですけど。もう一つちょっと別の次元のパワーが入ってこないと、せっかく地元から掘り起した宝が一つの産業になるためには、もう一つなんかいるんですね。人でつながっている世界もあるし。でも、組織でつながっている場合もあるし、民間側が勝手につながっている場合もあるし、このつなぎ方は結構ばらばらなんです。実は、マネジメントされてないんですよ。九州モデルがあるわけではないんです。地域地域。

九州も本当に勝手にやっていますから。だから、そこを研究したいなっということ、僕自身は思ってるんですが。また、その手法として、こういうもんだとまだ理論だてて、お話しするところまで言ってないですね。問題提起をして、そんな事を今考えてるんですね。

藤原 「食」では、ぜひ郷田さんにお話を重ねていただく必要がぜひあるんじゃないかと思います。スローフードの先駆者です。ただ、そのスローフードが近代という時間の流れにたいして、もう一回ゆっくりという視点を与えるだけではすまされない。郷田さんの活動を見てますと、そんな所を感じます。郷田流というか郷田式の薬膳世界構築感みたいなものをお教えいただけますでしょうか。

郷田 駄田井さんが女性だからと言って頂いて私は、ここにいる理由がやっと分かりました。そう、私は頑張らないといけないっていうのがですね、本当にある意味母性、ある意味女の時代が今来てるなっと思うんですよ。どういうことかっと言ったら、開発、開発、開発、開発とやってきた中で、これからは守っていかなければならない。育てていかなければいけないという時代が来ていて、これは女の人たちは頑張らないといけない。女の人の特長というのは、もう一つあって、決して肩書きで人を見ないということです。男の人は男の人って思って見ますけど、名刺をもらおうが何を見ようが肩書きでは人を見ないというのが女の特長なんです。だから、しがらみにあまり振り回されない。それで、楽しい事をしないといけないと思ひまして世界遺産運動を起こしましたが、やってる本人は本当に苦しくて、しがらみの中で、振り回され振り回され。どれだけ周りからいじめられたか。その中でね、やっぱり踏ん張る事ができるのは、やっぱり女かもしれません。決しておれないという、怖いものがないんですね。肩書きがないので。その事が、とっても強みかもしれない。男の人でもやっぱり、ここに

おられる方達は、そういう方ではないというのは分かってるんですよ。でも、たいがい割合からするとそういう男が多い。本当に名刺を見て、さっきのこれじゃないけど自分が上かしら下かしらとか、立場上どうやろうかとかということで、ものを言い始める人が非常に多いのが男の人だったような気がします。この間は、女の人の中にもそういう人がいて、郷田さん非常識ってのはいかんよ。あなたは政治を目指しなさい、ちゃんと政治家になって、そして物言える人になんないと言われて凄くびっくりしたんですよ。私、そんなしがらみの中なんかに行きたくないなと。

で、私は今、母親として、女性として、食の事をすごく大切に思っています。食を通して思う事は、田舎が主流、都市は末端。住んでる人の事を言うんじゃないですよ。でも、アスファルトとコンクリート。そして、水道の蛇口をひねれば水が出てきて。そして、デパートの地下を歩けば、魚の切り身・高菜・肉の塊。そして、きれいに洗った野菜。つまり、餌が売ってある。そういうものを食べている中でですね、本当に命を感じることはできないし、食を語る事はできないんです。食という事がですね。今、本当に本当に正しく食という事を見つめる事ができたら、日本中がもっともっと優しくなります。そう思います。

で、田舎に住んでる、私は田舎に住んでるんですが、田舎に住んでる人が、本当に田舎に住んでいる事を誇りに思い、田舎人らしく生きる事ができたならば、日本はもっと変わります。そう思います。人が見なければ、見てない所で除草剤を振る。格好だけの有機農業を言う。そして、人の見てなければ何でもある。形だけ形だけって言うのではなくて。本当に命があるんだなと。この水は海までつながっていくんだなと。国土交通省でもそうです。森林管理局でもそうです。農政局でもそうです。全部、本当に本当のことが言えて、ちゃんと横でつながることができたら。

今私は、食育の九州農政局と、食と農の応援団って言うのをやってるんですよ

ね。そう、田舎のおばさんが頑張らんといかんとよねっと思ってるんです。どうしてかっていったら、田んぼの中に命があるんだよと、こないだ東京の小学校でお話しました。小学校の5年生たちはなに言ったかというとね。東京に住んでる子供たちは偉いんですよ。田舎に住んでる子供たちよりも、もしかしたら環境の事をよくわかってくれてる。「僕たちはね、環境問題にものすごく関心があるんだ。動物たちの事、植物たちの事、川の事、いろんな事。だけど、今まで人間と思って、ちょっと一段下のものを見るようなつもりで自然の事環境の事を考えていたんだ」と。だけど、今日僕たちは、ヒト科のヒトっていう動物だと気付いたって。という事は、目線はおんなじなんだって。でね、本当に奇麗事では生きていけないです。私も、車乗り回してますし。いろんな命をいただいていますし。だけど、もっと謙虚になる事が食の入り口になるんじゃないかなと思うんですよ。そして、やっぱりあの、ヒト科のヒトって事は変わりませんね。

文化というか、若いお母さんたちがよく見ると、食の事をお話しするんですけど。私達は、ヒト科のヒトって言う動物なんですよ。ライオンが何を食べるか、ウサギが何を食べるか、野原の中の虫が何を食べるか。何が主食かって事は変わらないもの。私達は、主食をちゃんと大事にしましょう。そして、せっかく今こうして生きてるんだから、たまにはグローバルゼーション、世界の食べ物も楽しみましょう。だけど、食べるという事は本来は生きるって事だから。生きる事と楽しむ事の2通りの事があって。今私達、楽しむ事だけで食を見つめていますけど。本当は生きるために食べるという。食べれなくて苦しんでる人もたくさんいるし。動物たちもですね。さっき、森林の話をしましたけど、照葉樹の木、自然の山、雑木の山という本来あるべき山がですね、日本全体100あったとしたら、今1.6%しか残ってないんです。動物たちが生きられて、そして海の森を育てる事ができる森って言うのが1.6%です。海を、きれいな水を。源。そういうものを生み出す森が1.6%です。そこからですね、食の事は語れないんです。

格好だけで生きるのって簡単だけど。それじゃあね、やっぱり20年先の子供が悲しみます。そう思います。だから食は環境問題の入り口だと思います。いっぱい食の事の情報は、他にもたくさん持ってますが。あの、綾町は夜逃げの町でしたけども、そういう理念を持って街づくりをしましたならば、年間120万の方が訪れるような、小さな小さな町ですけどそういう町になったんですね。だから、理念とか、哲学とか、一貫性とか。そう、街づくりには一貫性っていうのは、とても大事だろうと思います。それは、ホテルでもそうでしょう。立派なホテルであってもね和風化、洋風化、何風か分からないようなロビーだったら、てんでおかしいし。せっかく環境にいい街作りをしています、うちの作った町営のホテルに泊まってください。って泊まったら、中性洗剤に色を塗りつけてにおい付けたようなね、そういうシャンプーがでてきましたら、やっぱり興ざめますよね。やっぱり一貫性っていうのはとっても大事なんじゃないかなと思うんです。そういう楽しいけど筋金入りのものって大事なんじゃないかなと思います。

藤原 ありがとうございます。どうぞ、質問が出ました。ご意見でしょうか。御所属お名前もおしえていただけますでしょうか。

阿部 質問じゃありませんけども。私は、先ほど発表会がありました。まると博物館の一学芸員でございます。駄田井先生が先ほどおっしゃいましたように、私どもは楽しいからやっているという基本方針でやらせていただいています。実はですね、私、いろんな葬儀に行ったり結婚式に入ったりして、お土産をもらいますね。引きで物っていうとか、いろんな物をもらいますね。そのときにカタログをもらうんですね。あのカタログは物なんですよね。それで、私そんなのは飽きたと。それで、金曜日に岩田屋の久留米支店長さんのお話をお聞きしたときも、そんな話をちょっとしたんですけど。そしたらね今朝、偶然プレゼントしていた

だいて一番喜ぶのは何かという話が出たんですね。そのときに、やはり一番喜ばれるのは、自分が体験をさせていただく、例えばマッサージをさせていただくとか、トレーニングに行くとか、そういうのをですね、ピアノを習うとか、歌を教えてもらうとか。そういうふうな体験というか、その体験をできるというカードをもらうんですよ。これはすごいなど。

私どもまるごと博物館の場合でもね、現地に行って草木染などを体験してもらいますね。時代の一番先端にいったるんかと思って、嬉しくなったんで、ちょっとここで発表させていただいたんですけども。そんなことで、私はやはり、今、物あまりの時代で物をいただいて、物に対する感謝がもうないですよ。

もう一つ、ちょっとツーリズムの方でちょっと申し上げますと。吉野ヶ里がありますね。佐賀県の吉野ヶ里。あれはですね、もう3年前までは、わんさかわんさ人が来てたんです。あれが、国が管理するようになったでしょ。国が管理するようになって、あそこに行ってもね説明者がいないんですよ。10人・20人の団体で行きますとね、3年前までは、国の管轄じゃなかったから、あそこの有志が出てきてボランティアで説明があったんです。それが本当に楽しかったんですよ。この吉野ヶ里はどんなにして発見したんですよ。そして今、こんなですよ。という事で話があったんですけど、もう先日もこんなにして団体で行くんですけど、どなたかそういうふうな事をしていただけませんかということで事務所に申し上げてもですね、いや、そういう人はおりませんと。そんな事はできないようになっておりますと。こんななんですよ。それで、ご覧になったと思いますけどね。本当にもう来場者がどんどん減ってます。そんな事で私は、その地元地元。まるごと博物館の場合は、地元地元が博物館ですよと、私どもの鍋田局長がお話されたようなことで、私はこれは、絶対続けられるし、楽しいし、続けていけるし。来場って言うか、来客者というか、訪問者も維持できるかなと思って非常に楽しんでおります。ちょっと一言させて頂きましたけど。要は、私どもは楽しくボラン

ティアやらせていただいていますって事を報告したかったんです。

藤原 ありがとうございます。語るに、地脈が通わない情報なんかよりも、むしろ体験を誘いだしてくれるようなそういう新商品。そういった物の方がずっと良いぞずっと楽しいぞっておっしゃってくださったわけですね。ありがとうございます。先生いかがでしょう。

佐々木 佐々木です。つい先ほど昼の部の理事会で理事長を交代しましたので、少し気楽な立場でお話させていただきます。いくつか言いたい事もあるんですが、時間もないので2・3点にさせていただきます。まず今回は、九州の思いのこもった企画を作っていただいて、しかも、とてもユニークな活動を踏まえた話があったので、大変躍動的なシンポジウムになってると思います。私も実はつい最近、綾町にうかがって郷田さんにお目にかかり、それから実は昨日、由布院に行って久しぶりに由布院の友人たちと会ってきました。10年以上前に、御花にうかがった時に、当時は広松さんがの掘割を復活する運動が有名でしたので、そういったことについても勉強させていただきました。

やはり、九州に来るたびに思うのは、先ほど藤原先生の阿蘇じゃないけど、やっぱりここは火の国で、地下に大きなマグマがあって皆さんの中で生きてるので、非常に勢いがあるといいますか、思いが非常に濃いと言えますね。そういった九州という自然環境の中で作られてきた生活文化というものが集まり。それがこういった分権化という大きな流れの中で、今一度、国の全体のあり方を変えていくときに、例えば、九州の町と村をつないでいくようなネットワーク運動が広がる事が一つの九州マネジメントなんでしょう。

で、それから今ご説明があった、例えば吉野ヶ里の文化遺跡というものが、国が管理をするという事が住民が参加する上で、やや問題性があるといったことを

考えてみると、文化行政というのは、わりと集権的な、日本のいろんな行政の中でも特に集権性の強いものです。教育もやはり画一的に上から進めてきたということがあって、文部科学省や文化庁が、今後地域に密着した展開になることは大事だろうと思います。それで、実はあの、韓国の文化経済学会もソウル一極集中だと言われましてね。我が日本の文化経済学会は、そこまでは行ってないんですけど、約600名の会員がおられる中で、やはり東京が200で、首都圏にしますと300を超えます。で、2番目に大きいのが関西。関西が、やはり関西圏全体で200名くらいになりますので、どうしても大都市集中になっています。文化はそういうふうには、文化産業なり文化関係団体は、大都市集中になってるということがあります。そういったことでいくと、新しい、言わば中央じゃなくて周辺から出てくるような色々な運動を学会としても積極的に取り上げて行って、それを理論的に明らかにしていくという事が、河北先生が今日は非常に熱くお語りになったんですが、やはりオリジナリルな物が大切です。オリジナリティーのない研究では意味がないし、そこにメッセージがないといけないわけです。

私どもは、学会のダイナミズムというのは多様性にあると思うんですよね。オリジナルで多様な発表の機会を、公平に与えるということが重要だと思うんです。そういった意味であちこちの文化資源というものに対して目を配り、そこからそれにふさわしいマネジメントのあり方というものを提言していかなければならないと思います。さしあたり例えば、先ほど九州における文化芸術という話が、駄田井先生のほうから出ましたが、仮にそういうことを考えた場合、道州制というのがこのまま簡単にいくとは思いませんけども、例えば文化行政なり、芸術支援の行政の面での分野、九州アーツカウンシルですね。「九州芸術評議会」ものを、九州で設立するようなことというのは、一つの手がかりになるんじゃないかとお話を聞いていながら思った次第です。

やはりあの九州マネジメントということで考えていきますと、こちらでは、九

州部会が独自の活動をされているんですが、やはり、九州の中でも博多に一極集中であると。ミニ一極集中ですね。九州全域では、学会員になっておられない、学会員ゼロの県もございますので、この機会に是非、広くお入りいただいて、そういった学会の多様性と言うんでしょうか、そして、九州マネージメントを支えていただくと。本当は沖縄にも展開したいんですけども。そういう意味で、今日のテーマが文化資源と自然環境を活かした分権的で多様なマネージメントという事についてもですね、九州でも最初の問題提起になってきているのではないかと、いうことを思いました。そしてさらに、九州は韓国に非常に近い位置にあります。私は、前に文化庁長官にお話した事があります。「ヨーロッパでは、ヨーロッパ文化首都という事業が成果を上げているので、アジア文化首都、アジア規模で取り組みができるようにしたい」とお話したことがあります。地域の資源を生かした文化都市づくりの事業を、日韓両学会がこれから協力してやっていけたらいいなというふうに思います。これは今後、皆さんと検討してみたいと思います。どうもありがとうございます。

藤原 ありがとうございます。大阪市立大学の佐々木雅幸先生に全体を結んでいただきました。文化庁は「九州沖縄の文化力」という新しいプログラムを動かして始めております場面です。まさに先生が今フレームを示してくださった事に、これから打って出るぞという事なんです。ただ、今のお話で、改めて気付いた事が一つあります。確かに私どもは、どっか得体の知れないマグマのようなものをですね、九州の地の底に感じているんじゃないかと。ですから、先生方のお話を聞いていて、もう本当に今日のは上澄みでしかない。上澄みの下に幾重にもマグマが隠れているんだなとお気づきになられたんだと思うんです。ただそのマグマを、私どもが一方的に出していくと本当に独演会になってしまう。それを皆さんとどう共感しあって、共有しあって本当の力に育てていくかっていうのは、

まさにこうマネジメントのもう一つの力が必要になってくると思います。

この文化経済学会，久留米大学の新しく完成いたしました文化経済学科，こういったものを足場にして，皆さんが自分たちの力をより高めていく次なるステージ作りに生かしていただけたらいいんじゃないかなと思います。壇上の方々ともこれから個別にご交流いただきまして，懇親交流を深めていただきたいと思います。つたない役回りだったんですけど，どうも長丁場，フロアの皆さん，それから壇上の皆さんありがとうございました。

司 会 藤原先生，河北先生，姜先生，養父さん，郷田さん，駄田井先生。どうもありがとうございました。以上を持ちまして，久留米大学文化経済学科完成記念シンポジウムを終了としたいと思います。皆さん長い時間どうもありがとうございました。